
緋弾のエリア 救護科の変態

sirasu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 救護科の変態

【Nコード】

N6950R

【作者名】

s i r a s u

【あらすじ】

東京武偵高校にカムイと呼ばれた男がいた。その男の腕前は死にくつがえすほどと称されるほど。さらに裏社会では記録に残らない仕事をしている。腕前は未だに起こしてきた殺人が未解決事件として警察や武偵に尻尾すらつかませていないほど。そんな男は大変な変態だった。そんなお話です。原作に沿って書いていきます。第二作目となっています。

主人公紹介（前書き）

ども、sirasuと申します。

一応、アリアの原案ができたので投稿しておきます。

この小説の投稿は今のやつが終わってからになります。

主人公紹介

主人公紹介

名前 カムイ

性別 男

出身国 不明

学校 東京武偵高校 二年

科目 アンビュラス
救護科

ランク Sランク

武器 メス数本とブラックナイフ一本 銃器はグロック19

ステルス
超能力 G15の血液操作能力

性格

普段はとてつもなくめんどくさがりやだが、メスやブラックナイフを持つとやる気を出し始める。解剖や殺しが大好きな大変な変態。疑問やわけのわからないことが嫌い、だから解明することができると解剖が好きで特に不思議体質や超偵を見たときに暴走することもしばしば。また、殺しを好んでおり戦闘狂である。その戦闘能力は強襲科のSランク並みで能力使用時にはそれをはるかに上回る実力を持つ。

主人公紹介（後書き）

こんなのでいかがでしょうか。

調べていないのでかぶっているかもしれませんが、変える気はないですよww

元から自己満足なので・・・今は楽しんでいただくのが一番ですけど追加して欲しい要素などがありましたらジャンジャンください。現段階では補正がガンガン効きますので全然大丈夫です。

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願いします。

ブログス 1 (前書き)

こんばんは

s i r a s uの最初のアリアの投稿となりますね。

一応、今のやつが終わってからと宣言していましたが、なんか書きたいなと思って書いていたら、完成したので投稿することにしました。

プロローグ 1

プロローグ 1

私は今とある家に来ている。狙いはブラックナイフ。価値は裏では国宝級と謳われるほどだ。それがこの家にあるという情報が入った。もちろん綿密な作戦計画を練った上での潜入だ。

家の住人は三人、父親と母親そして一人の子供。家は1LDKの一軒家。子供の年齢は私と同じ。

そこに国宝級と謳われたブラックナイフがあるのだから盗まないはずがない。

だって私は理子。リュパンの末裔なのだから。

だが、ひとたび家に侵入してみるとむせ返るような血の匂いが充満していた。

「これは・・・」

情報によると家族の中はとても良かったはずなので家族内での構想はないはずだ

「・・・だとしたら、先をこされちゃったかな」

例えばの話だが、ありえないこともなかった。

ただ、血のにおいが充満していると言うことはそれをしたやつがまだここにいた可能性が高い。だから足音を出さずにしのび足で移動し、目的の品がある可能性が高い部屋に行く。

そこは父親の書斎だ。扉の前に来たら静かに扉を開き中を見る。しかし、そこには誰もいない。しかも、戦闘の痕跡もなかった。

次に可能性の高い部屋は寝室。この家族は両親と一緒に寝て、子供は別の場所で寝ている。確かに身元に大切なものを置いておくのは安心できる。頭の悪い金持ちがよく使う手だ。

ただし、一つだけ気にくわなことがあった。それは血の匂いが強くなっていることだ。

・・・まさか

最悪のビジョンが脳裏に浮かぶ。ランドセル状のリュックの中から愛銃であるワルサーP99を二丁引き抜く。それを両手で音を出さずに握り、そつと扉の取っ手に手をかけた。

スツと扉を開け中を覗くと・・・この家の親と思われる男と女の人々が床に横たわっていた。その二人は首を切られていて、血が床いっぱいに広がっている。

「だれ」

そんな光景に目を疑っているとこの家の子供と目が合った。その子供が殺しているはずだが、返り血を浴びていなかった。だが声は冷たく目はこちらを確実に捉えている。そして、手にブラックナイフを握っていた。その子供・・・青年はナイフをまるでペン回しをするかのようにくるくると回している。

「ねえ、だれ」

本能が逃げると叫ぶ。こいつは危険だと。心の中ではそれを否定し

ていたが足が動かないことに気が付いた。

「早く答える。誰だ」

「・・・理子」

思わず答えてしまった。そんな自分に腹が立つ。

「何だリュパン四世か・・・狙いはこれか」

青年は手に持っていたナイフを見せ付けるように私のほうへと向けた。

私は動揺を隠しきれなかった。まずは私と同じ年齢の子が両親を殺していること。これについては、はっきりとした証拠はないがたぶんそうだろう。次に私の名前を知っていたこと、最後に国宝級のブラックナイフをまるでおもちゃのように扱っていることだ。

「どうしたんだ？ 出て来いよ。どうせ場所はわかっているんだ」

銃を握っていた手の手汗がひどいことに気づき銃を相手に気づかれないように離してスカートでぬぐった。そして覚悟を決め、部屋に入る。身長は平均的な170センチメートルぐらいだ。顔つきは悪くない。

「こんにちは、で良いのかな」

青年は気軽に話しかけてきた。そのことにもイラついた。

「・・・こんにちは」

しかし、またもや返事をしてしまう。

「固いね、楽にして良いよ。別に興味がないからさ」

その言葉にまた少しだけイラツとくる。ただし、ここでそれを相手に知らせるとどうなるかわからないので必死にその感情を抑える。

「見ても変わらないか・・・良いよ、興味がわからないから」

「な、何が、良いの？」

怒りと本能から来る恐怖で言葉が震えている。

「逃げてもだよ。別に追いかけないから安心してよ」

「ぶっ殺す」

ついに堪忍袋の緒が切れた。初対面の人間にここまで馬鹿にされて黙っていられるはずがなかった。恐怖を怒りで無理やり押し込め銃を向けて撃つ。弾丸の狙いは眉間。亜音速の弾丸はそこを貫くはずだった。

だが、青年は軽く頭を倒してそれを避けた。

「俺に戦闘の意味はないのにな」

「ふざけるなっ!!」

さらに両手のワルサーの引き金を引く。次々と発射される弾を青年は最低限の動きでかわしたり、ナイフの側面を使ってそらしていた。それも当たり前のような表情で。

「はあ、これだけやれば十分でしょ。これ以上興味がなくなっても困るからさ」

銃弾が切れたワルサーの弾倉だんそうを素早く再装填し、さらに撃ち続ける。それでも鼻歌を歌いながら、涼しい顔をしていながら銃弾を避けたり防いだりしている青年を見て、自分を青年との実力差を知る。だからすぐに冷静さを取り戻した。

しかし、それでも銃撃が止まることはなかった。なぜなら青年は私の目の前でそれも銃弾を防ぎながらあくびをしているからだ。

油断してる・・・これならいける！

ワルサーの引き金を引きながら距離をつめる。

「あれ？　もしかして殺る気なの」

そんな言葉を言っているが青年は眠たそうにしている。

そして確実に相手が油断しているときに必殺の間合いに入り、髪に隠していたナイフを出し、『双剣双銃カルドラ』の二つ名のごとく銃と剣で襲い掛かった。

ザクッ

必殺の覚悟で放った一撃だったので普通なら青年が切られているはずなのだが切られていたのは私の髪の毛だった。その髪の毛は青年の手に握られている。

「前言撤回だ、興味がわいた。どうなってるんだ？」

急に唇をゆがめ笑い始めた。そして信じられないことに髪の毛を食べた。

「ふむ、髪の毛の成分は同じか・・・だとしたら」

ぐりんとこっちのほうを向く。

「お前か・・・」

気持ちが悪い笑みを浮かべ少しずつこっちに近づいてくる。怒りによって押さえつけられていた恐怖がよみがえる。今度はそれにさかえなかった。気づいたときには近くにあった窓を蹴破り飛び降りた。

最後に振り返ってみると青年は私を見下ろしていた。それも子供のようなキラキラとした目で。

ブローグス 1（後書き）

どーでした？

ほぼ即興だったので矛盾が生じているかもしれませんが、これできたいと思います。

これは1なので2もありますよ。2は今の書いているが書き終わらなくても投稿します。本遍は宣言どおりです。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

プロローグ 2（前書き）

どもsirasuです。

またまた即興で書いてしまった。なので矛盾が生じたり、キャラの口調が違ったりするかもしれません。すいません。

ではプロローグ 2、どうぞ

ブローグス 2

ブローグス 2

「ボクに何か用？」

とあるマンションの屋上。そこに一人の青年と美少女が立っていた。

「わざわざ呼び出したんだから」

青年は普通の私服の上に白衣を着ている奇妙な格好で、美少女は部分的に体を覆う、西洋の甲冑をきて、銀髪を二本の三つ編みにしつむじの辺りで結ったストレートロングヘアの髪型でサファイア色の目をしている。そこまでなら一般人なのだが手には美少女の身長ほどの大剣が握られている。

「単刀直入に言わせて貰う。イ・ウーに入れ」

「やだ」

青年はすかさず拒否る。

「興味がない」

と続け、長髪を乱暴に首の後ろで結び一本にしている髪をひるがえした。

「じゃあね」

とあるマンションの屋上に唯一ある出口へ歩きだす。

「逃がすと思っているのか」

そう言い捨て美少女が投げたのはヤタガンと呼ばれる湾曲した刃物だ。その投げられた刃物は青年が行こうとした出口の扉に刺さった。

「物騒だね」

そう言ったが止まることはなかった。少しも気にしていないかのように進む。歩くスピードも変えないし歩幅も変わっていない。それは最初から狙われていないことを悟っていたかのように無視した。

美少女は青年の行動に少しだけ臆したが逃がさないように青年の背後に近づいた。狙いは首、攻撃方法は剣の柄。

ギインッ！ 耳障りな金属音が屋上で響く。ブラックナイフと大剣の柄がぶつかった音だ。

「やれやれ、俺は戦いたいわけではないのだが」

青年の口調が変わると同時に握られていたナイフ。受け止められていることを認識した美少女は後ろに飛び距離を離す。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言で見つめあう二人。しかしその均衡はすぐに崩れた。青年が背を向けたからだ。

「なぜだ」

その行動の意味がわからないのか美少女は問う。すると青年は少しだけ振り返る。

「ボクには興味がない。君にもイ・ウーにも」

手に持っていたナイフをしまったかと思えばまた口調が変わっていた。話して来たのだがその瞳に美少女は映っていなかった。元から眼中にないのだ。そしてまた出口のほうへ歩き出す。

その行動は美少女に剣を振らせる理由としては十分だった。

殺さなければいいのだ

「・・・」

美少女は飛び出し、無言の気合で剣を振る。大剣の重みを利用した一撃は空気を裂いて青年の背中に襲い掛かる。

ギインッ！ 大剣とブラックナイフはさつきより大きい音を出した。だがナイフは切れておらず、もちろん青年にも傷一つついていない。

「なっ！？」

その光景に目を見開き驚く美少女だったがすぐにその表情は変わる。ガキイン！ 一度大剣からその刀身を離れた黒きナイフはすぐに大剣を押し返した。

ナイフには傷一つついていない。聖剣デュランダルと呼ばれた大剣の斬撃を防いで押し返したのだ。ありえないことが目の前で起こったことに動揺する。

「だから俺は戦いたくはないんだ。寝ていたいだけだ。だからほっとしてくれ」

涼しい顔をして言う青年の瞳にはまた美少女は映っていない。

「甘いな。それで勝ったつもりか」

心に広がっているであろう動揺をかううじておさえることに成功した美少女がヤタガンを投げる。その投げられたナイフの先は青年の足元。そこにきれいに刺さったヤタガンは屋上の床を・・・凍らせた。

青年の顔が驚愕の表情になる。

「これで逃げられまい」

そしてもう一度飛び込み青年のナイフを持っている手では防ぐことのできない部分へ攻撃を加える。今度こそ、勝利を確信した。

ズバッ！　そう確信したはずだ。だが美少女の手に伝わってきた感触は人の体のそれではなく、屋上の床を切る感触だった。

「危ないな。でも興味持っちゃった」

青年は楽しげな声を上げて数メートル先にたっている。よく大剣が切った部分を見ると床が何かに破壊されていた。そして青年のナイフを持っていた右手の親指が切れて血が出ていた。

「ねえねえねえ、何それ？　何それ？　あはははは」

血が出ているのにもかかわらずナイフを握り締め笑い始める。傷口からは通常じゃありえないほど出血していた。

そして青年は動いた。美少女の懐へ素早く入りナイフを下から上へと振るう。美少女はなんとか上体をそらして回避するが青年はもつと速かった。振り上げられたナイフをすぐに振り下ろす。こんどは体勢が崩れたまま大剣を強引に引き戻し弾く。

金属同士がぶつかるような音がまた屋上に響く。その後美少女は青年と距離をとり再びにらみ合う。だがその美少女の服は青年の血で汚れていた。

「ねえ、入ってあげようか」

「本当か」

「うん、けど」

「なんだ」

「君の全てを見せてくれたらね」

口元をさらに異様に歪め笑う。美少女は寒気を感じたのか自分の体を抱きしめるかのように両腕を巻きつけた。

「やっぱり、嫌だよね。だから・・・俺の目の前で頭をたれさせてやるよ」

そう言いナイフをくるくると回す。そしてそれを止めてナイフの刀身を指で弾いた。

ズバッ！ 何かが切れる音だ。その音は美少女の服の下から聞こえた。みると美少女の服が血で染まっていくな。

美少女は何が起こったのかを必死に理解しようとしている表情で膝を床につける。

「あれ？　もしかして、俺の力知らなかったの？」

メスを白衣のうちポケットから何本か抜き、放つ。放たれたメスは美少女の目の前の床にストトトト、と音を立てて突き刺さる。

「これで、わかったよね。君じゃ勝てないことが・・・さあ、頭をたれろ」

これでもかと実力の差を示された美少女は唇をかみ締めた。そして頭をたれるような動作で手を床につけ

ガキンツ！　巨大な氷柱を出し、逃げ出した。

青年はその姿を目で追っていたが、追うことはなかった。

「まあいいとするか・・・寝ようかな」

ナイフをしまい。屋上の扉の中へと進んだ。

ブログス 2（後書き）

どーでした？

次は・・・なんと・・・レキです。ヒューヒュー↑一人で勝手に喜んでいきます。

レキ良いですね。あの無口な感じ・・・さいこおーーー

というわけで次回はがんばります。結構時間がかかるかも・・・

ブログス 3 - 1 (前書き)

こんばんは sirasuです。

ようやくレキの出版ですよ。めっちゃうれしい。

ではブログス 3 - 1、どうぞ

プロローグス 3 - 1

プロローグス 3 - 1

パンッ！、と銃声が鳴り響き、その弾丸はボクの足元に突き刺さった。

「ひいー！！」

「あいつだ、狙え！！ 頭以外を狙ってしとめたら一年間の単位をもらえるぞー！！」

数十人の狙撃科スナイプの受験生が僕を追いかけてくる。何でこんなことになっているのかと言うと・・・

「めんどくさいから・・・ここで良いよね？」

誰もいない部屋に帰ってこない疑問をかける。

ボクは東京武偵高校の試験の前の日に教師からの特別な依頼で高校に呼び出された。その依頼とは武偵殺しで負傷した武偵を治すというもので整形までボク一人がやったので気づいたら十二時を超えていた。だから、家（といっても誰もいないが・・・）に帰るのがめんどくさかったので仮眠室と書かれていたところに寝ることにし

た。そこはベッド以外何もなかったが、背に腹は変えられないので白衣のままですぐに寝た。

そして起きてみればそこは戦場だった。いつのまにか狙撃科スナイプの試験会場となっていたボクが寝ていた場所は下手な武偵の銃弾が飛び交う場所になっていたんだ。試験内容は建物の中にこもる側と建物の外から狙撃する側に分かれて交戦する、と言う内容。

もちろん、面倒ごとは勘弁だったのでカメラを見つけ次第ボクが存在を試験官へ認識させようとした。だが、それがいけなかったようだ。銃弾を避けようとして必要以上にびくびくしながらカメラを探していた姿を知らない間にカメラが捉えたらしく、すぐに不審者扱いに・・・さらに、それに拍車をかけるように先生が・・・

『不審者を倒せば一年間の単位をくれてやる』

確かにそんなことを言った。それを聞いた受験生は目の色を変えてボクを搜索し始める。建物の中にいる受験生は護身用として持っていた拳銃を抜きこの中を走り出した、外にいる人たちは窓の建物の内部が見える範囲で搜索を開始した。

その様子を物陰から身長に窺っていたボクはすぐに武偵法を思い出す。

「確か・・・殺しちゃいけなかったよね」

そう武偵は人を殺してはいけない。それを利用して投降しようとしたところ・・・

『今年は腕の良い医者が入ってきたそうだ。今回は頭以外ならどこを撃ってもかまわん。かまわず殺れ』

試験管である先生はそう言った。

それたぶんボクのことじゃないかな、ハハハ

乾いた笑い声を心の中で響かせ、冷や汗をかきまくるボクだった。

よって、この状況だ。投降しようとしてもその前に確実に撃たれてしまうのであきらめた。ここの校則に『第10条 諦めるな、武偵は決して諦めるな。』とあるが、そんなことは関係ない。ただ今死に直面しているんだ。そんな甘いことを言っている場合ではないので、隠れながら建物の外（安全な場所）に出ようとした。

「いたぞっ！ こっちだ」

「ええっ！？」

出口付近で待機していた武偵に見つかってしまった。その武偵はすぐに増援を呼びながら銃口をこちらへと向ける。今の状態ではあまり武器に詳しくないのでその銃の名称はわからないが、危険だっことはわかってる。だからすぐにUターンし再び建物の奥に・・・出口は遠くなった。

窓などに注意しながら移動し安全な場所を探る。確かに安全な場所などはないが一応身を隠す場所ぐらい確保したかったのである一室の扉を開けた。しかしこの世に神様はいないらしい、ギィと

もう一つの扉が閉まる。

これは良くある事だ。一つの部屋に二つの扉があり片方が開いていて片方が閉まっている場合、閉まっているほうを開けると開いていた扉が勝手に閉まる、ということだ。いろいろと条件があるらしいが今回は風が窓から入ってきたこともあったので予想以上に強く閉められた。

「見つけたぞ」

「ハハハ」

その音に気づいた武偵が入った来た。もう乾いた笑い声しか出ない。

うそでしょ・・・

頬をおもいつきりつねってみたが・・・痛い。どうやら現実で神様のいない世界らしい、増援が到着しこの部屋を包囲される。スナイプといってもそれに特化しているやつなど一握りしかない。だからこそボクの目の前に立っている人たちは一通りのノウハウはある。やられる覚悟もしているはず。

「仕方ないよね・・・うん、仕方ない」

「何言ってるんだよ」

この部屋にあるカメラを探したがなかった。

良かった。めんどくさいことにならずにすみそつだ。

カメラがないことに安心し、右手で白衣の中に仕込んでいたメス（

一体化しているもの）を何本か掴み、投げつける。そして左手で一本だけ持ち襲ってきた武偵の中に飛び込んだ。

「殺すぞ」

俺には刃物を持つと人格が変わる癖がある。これは先祖代々伝わっているもので厳密に言う凶器を持った際に攻撃的な人格になる。ただし俺の場合は刃物を持ったときが一番攻撃的に、これには個人差がある。さらに凶器といっても銃などの遠距離で使うものには反応しない。しかし、手裏剣は除く。

そんな異常な特異体質を持つ俺が投げたメスは正確に銃口へと突き刺さり使用不可能にした。一番最初に入ってきた名も知らない武偵に飛び蹴りをぶちかます。それによってドミノ倒しにどんどん人が倒れていった。

「馬鹿か、狭い部屋に大勢入ってどうすんだよぉ！」

叫びながら自身に向けられている銃口から切り刻んでいく。その様子を見た何人かは逃げ始めたが、俺はすぐにメスを投げつけ制服を地面や壁に縫い付ける。

「逃げられるとでも？」

やべえ、高揚してきたよ

ニヒルと笑う。その笑いはまわりに恐怖を与え一瞬の隙を生み出す。その隙に近くににいるものから気絶させていく。

高揚してきたは良いが・・・めんどくさいことはしたくないしな

傷をつけると治療するのは俺たちの役目なので傷をつけないように全ての武偵を無力化した。左手に持っていたメスをしまい、投げつけたメスを回収する。

普段は使い捨てなのだが今回は違った。これも面倒事を避けるため。回収することもめんどくさいが後で先生たちに聞かれる方がめんどくさい。

「衛生上にも良くないんだけど・・・」

最後のメスを回収したところでまとめて内ポケットに入れる。武偵高校の白衣は一応防刃・防弾使用となっている。一応の理由がいまいちよく理解できないが興味がわからないのでこの件は放置することとボクの中でそうなっている。

「ふああああああ」

これである程度は時間が稼げるはずなので油断したボクは大きなあくびを漏らしてしまった。

そんなときにふ、と耳に入ってきた一つの詩。

「私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

パン！、銃声が聞こえる。だが銃弾は音速を超えているため聞こえてきたときにはすでに撃たれていた。

うそつ、心臓！？

胸を貫く痛みが教えてくれた。手で傷口から血が出るのを防ごうとするが血がとまらない。

やりやがったな・・・仕返した。

そう言った彼の手にはブラック・ナイフが・・・

ブローグス 3 - 1 (後書き)

2は早いうちに出したいと思います。

これも即席で作ったので読みにくかったりしたと思います。その点
はすいません。

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います。

ブローグス 3 - 2 (前書き)

おはようございます。

ブローグス 3 - 2、どうぞ

ブローグス 3 - 2

ブローグス 3 - 2

やりやがったな……仕返した

いつの間にかカムイの手にはブラックナイフが握られていた。もともとブラックナイフなんて武器はこの世にはない。ただこの黒い刃を持つナイフがそう呼ばれているだけだ。

だが、このブラックナイフと呼ばれていることをカムイは気に入っていた。なぜなら、それは威厳であり恐れであるから。

今まで記録に残らない仕事たくさんしてきた。これを見たものはすぐに戦意を失い、命乞いをする。

そんな抵抗もしないやつらを殺すのは楽しくはなかったが、おびえているところはすごく楽しかった。

スナイパー……お前も俺の目の前で頭をたれろ！！

ナイフを持っていない手で傷口をさわり血液を操る。傷口を血液で作った壁でふさぎ応急処置をする。

そして撃たれた方向へと目を向けた。

あいつか……

凶器を持っている状態は恐ろしいほど感覚が鋭くなる。そしてまた血液操作能力を使い始める。

「『かんけつせん
間血泉』」

足元に圧縮した血液を作り一つの方向へと穴を開ける。するとそこから大量の血液が噴出し体を強引に押し、空中を駆ける。名も知らないスナイパーはそれを迎撃しようと撃ってきた。

連射性があるのか……そしてこの音………ドラゲニコフ？

前面へと展開した血液の壁で銃弾を防ぎながら、発砲音と性能だけである程度、銃の種類を判別する。

そして数十メートル離れていたスナイパーのいた屋上へと足をつける。

「名前は？」

「あなたから名のるべきでは？」

「そうだな、カムイだ」

「レキです」

そして無言のまま見つめあう。いつの間にかレキの手に持つドラゲニコフには銃剣が取り付けられていた。

二人は合図も何もないのに同時に構えを取る。

カムイは右手を隠すように半身になり左手を軽く前へと出した。
レキは引き金トリガーに指をかけたまま、銃身を支えるように左手をそえて銃剣の切っ先を下方向へと向けた。

「狙撃銃でアル」カタか？」

そう言い、カムイは飛び出す。未だに体の後ろにナイフを隠している状態で接近する。

レキの突きを左手ではらいナイフで払ったところを打ち上げる。すぐに上にあげた手を戻し突く。レキはやや強引にドラグニコフを引き戻し受け止めた。

が、衝撃を流しきれず吹き飛んだ。

いや、自ら飛んだ!?

手に伝わる衝撃の軽さからレキが吹き飛んでいないことがわかった。

「私は一発の弾丸」

ガアンツ！ ギイーン！ ドラグニコフが火を噴きナイフを弾き飛ばす。

レキは自らうつろに飛ぶことで衝撃を逃がしそのまま空中でナイフへと標準をあわせ撃った。

レキの化け物じみた行動に我を一瞬忘れてしまった。

凶器は手にないので、高揚感も失う。

「あなたは危険です。風はそう言いました。ですが、ここで殺しては風の命令に反します」

「風？」

「あなたは私に負けました。なので、おとなしくしててください」

カムイの疑問を無視しレキは話を続けた。

そのことに怒るわけでもないが、ボクにだって譲れないものぐらいはある。

「負け…ね」

「はい、あなたの負けです」

「ふふふっ……ねえ、知ってる？」

レキは少しだけ首をかしげる。

「ボクは負けが嫌いなんだ。無視されるよりもね」

「俺に負けはないんだよ」

急に口調が変わる。体は動いていないのにカムイの手にはナイフが握られていた。

確かにカムイの手に握られていたナイフはレキが弾いたものだ。

「不思議か？」

カムイは手に戻したナイフをレキに見せ付けるように突き出し、言葉を続ける。

「不思議なことは良いよね。興味がわくのはもつと良い。それを見ているだけで時間が過ぎていくんだ。君にはわからないと思うけど、楽しいんだよ、とても」

再び両者が構える。

「行くぞ」

カムイは血液操作能力を気に入った相手には使わない。

レキも気に入っている相手の中に入っているので例外ではなく、能力使用はしていない。

「……………」

無言で突きを出してくるレキに驚きながら突きを払い、隙を見ては反撃するカムイ。

カムイの反撃を避けるか銃剣で受け止めレキも隙を見て反撃する。

「楽しいな」

突きを払いながらカムイは笑っていた。完全に突きをよけきれず、頬を切られていても笑っていた。

カムイはレキの銃撃をさせないために接近し続けている。それでも銃剣をうまく操り攻撃を続けるレキ。

楽しいな。全力で行っても良いけど、このままずっと戦っていたい。

ずっと無言で攻撃や防御をしているレキ。それを笑いながら攻撃や防御をしているカムイ。

はたから見れば、さぞ気持ち悪い戦いだろう。

それでも両者はお互いの武器を振り続けた。

キーン！ キーン！ キーン！

お互いがお互いの動きになれて徐々に早くなっていく。

レキの表情はまったく読むことができないが汗をかいていることから疲れ始めている。

だがカムイは汗一つ書いていなかった。

「そろそろ、本気で行くから」

そう言い捨てて、ナイフを振るう。

その速度はレキの目でさえ残像しかとらえることができなかった。レキが一閃したと思えばすでに五回は切られているような尋常じゃないスピードでナイフを振るっていた。

「遅い遅い」

まだまだ速くなっていく。カムイは笑いながら切っていった。

切られても表情を崩すことなく、声を出すことのないレキを見てカムイは興味を持つ。

おもしろいな。うん、おもしろい。よしっ、理子にデュランダルにこいつに当分は困らないな

そして止めをさす。もちろんナイフを逆に持ち、柄でみぞおちを突き刺した。

腕に力なくのしかかってくるレキの重みを感じる。

「おもしろかったな、治療はただで良いや」

動かなくなったレキを抱えて救護科へと向かった。

ちなみにスナイプの入試は後日再度行われることになった。

ブログス 3 - 2 (後書き)

どーでした？

今回も即興で書いたので読みにくかったかもしれません。

すいません。

次回はからは本編ですがISが終わり次第書きます。

第1話 アリアって誰？（前書き）

こんにちは、ようやく一話を出すことができました。

一応ISのほう書き終わりましたので心配せずともそろそろ連載を始めたと思っています。早くて今週中には始めます。

よろしく願いしますね

ではでは第一話、どうぞ

第1話 アリアって誰？

第1話

廊下を歩いている青年が一人いた。制服の上に長つたらしい白衣を羽織っている青年だ。しかし時間帯が少しだけおかしい、始業式はすでに終わっているのに今だに教室に入っていない。

その青年は血のように赤い長髪を首の辺りで一本にまとめていて、同じ血のような赤い瞳を持っていた。顔は……整っている部類に入るだろうが、本人はそのことを気にしていないので自覚していない。

そしてこのボクことカムイは学校にいる。いるというよりかは「武偵殺し」のせいで住み着いている、といった表現のほうが近かったりする。

「武偵殺し」はよく武偵以外の人も結構巻き込んでしまうためけが人が増えたりするんだ。しかも、ボクの腕前が世間に知れ渡っているだけで人が集まる集まる。そりやもう大量に集まった。

そしてその大量のけが人を治療しているうちに新学年の新学期になりました。

はあ……めんどくさ……体が半分ぐらい吹き飛んでいるやつがいたなら楽しめたのに……

現在ボクはリノリウムの床を歩いて新しい教室へと足を運んでいる。時間から見てもすでにHRは始まっているだろう。

今日で高校二年生になったはずなのだけれど……体に残っている疲労が限界で始業式の時点で学校に行きたくないと思ってしまった。何度学校に行くのを止めよう考えただろうか……手の中にあるクラス表がなければたぶん行かなかっただろう。そこには……

遠山 キンジ

峰 理子

と名簿にかかれていた。クラスは二年A組でこの二人だけボクが目をつけている。

理由はいたって簡単だ。

この二人は間違いなくボクの知的好奇心を満たしてくれるからだ。あゝ楽しみだな……この一年間は忙しくてなかなか遠山に近づけなかったし、理子ちゃんにもあれ以降会っていなかったからね。

そうこうしているうちに教室に到着した。

胸が高鳴ってしまっただけなのに、すぐに扉の取っ手をつかみ開ける。

「キー君は彼女の目の前でベルトを取るような何らかの行為をした！　そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！　つまり二人は——
——熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

第一声がこれだった。あまり恋愛の話に興味がないので一気にテンションががた落ちだ。

「先生、ボクの席はどこですか……」

馬鹿みたいに騒いでいるクラスを無視して先生に話しかけた。

先生は事務的に席を教えて、クラスの話題に入っていった。

自分の席……クラスで一番後ろの廊下側の席に座りことが治まるのを待った。

理子は未だに俺の存在に気づいていないらしい。すこし気配を消しているとはいえ残念だ。

あつ、そうそうこの状態（凶器を持っていない上体）でできることを紹介しておこう。

- ・気配を消せる
 - ・能力使用可能は当然
 - ・常にめんどくさがりや
 - ・一番銃の扱いがうまい（それでも並）
 - ・勘が鋭い（これは全部状態に当てはまるけど……）
- 以上だ。特に今のままではこれといってできることはない。
これがメスとナイフで違ってくるからめんどくさいのだ…説明が。

ずぎゅんずぎゅん！

おっ！？　なんだ？

発砲音がしたのですぐにあたりを見渡す。

発砲したのは……赤っぱい長い髪をツインテールにしている小さい女の子だった。

あれ高校生か？　中学生にしか見えないけど……

「れ、恋愛だなんて……くっだらない！」

その少女とはなかなか気が合いそうだ。けど……興味対称にはならない。

薬莢が落ちる音がしてクラスの空気が一気に冷える。

この学校の規則として『必要以上に発砲しない』とあるので原則撃つても良い。

理子はゆっくりとした動作で着席し、ようやく俺の方向を向いてきた。

よっ、と軽く手をあげ存在をアピールすると理子は表情をこわばらせた。

「全員覚えておきなさい！　そういう馬鹿なことを言っちゃつには…」

これが後に世界に名をとどろかせることになった『緋弾のアリア』が最初に東京武偵高校で言った言葉だった。

「——風穴あけるわよ！」

即行でふせいでやるわよ！！　とでも言つべきか、否か……

「お前の目的は何だ」

昼休みになった瞬間から俺はこの場所に引っ張り出された。引っ張ったのはもちろん理子だ。

「性格が変わったね。それが本当のお前？」

「私の質問に答えろ！」

「怖いな〜もう。そんなに怒らなくても……別に何もしないからさ」

理子はそう言っても真剣な眼差しで俺を見ていた。

どうしても俺の言っていることが信用できないらしい。

まあ、あんなことしたから、仕返しにきたとでも思っているんだろう。

「リュパンの名前を使って脅したりしないからさ、安心して髪に隠しているナイフをしまつてよ」

これは勘だったけど理子のビクついた反応を見ればすぐに凶星だと分かる。

理子は隠すのが苦手、とすぐにとりだしたメモ帳にペンを走らせる。

「何を書いているの？」

「なんでもないよ〜。それよりも……」

ブブブブ、と携帯のバイブが震えた。

めんどくさいと思いつつも、先生からだったので出ないわけにも行かず、しぶしぶと電話に出た。

「急患」

とのこと。いかにも事務的過ぎる命令だった。

確かにこの一年間で卒業できるほどの単位は貯めておいたはずだけど……患者がいる限り救護科に休みはこない。
アンビュラス

「ごめんね、聞きたいことがいっぱいあるけど…むりぽ。じゃあね

」

理子が何かをボクが走っている間に言っていたが、聞こえなかった。

「終了、と」

ボクは手術室から出る。

終了といってもボクがするのは重要なところなので完全に終わったところではない。

縫合などの後始末は下級生などにまかせている。

「よくやった」

「さいですか……なら、休みをくださいよ」

「いいぞ」

思いもよらない先生の言葉にフリーズする。

確かにアンビュラスでは普通の病院となんら変わりはないので休みはいつでも取れるのだが、

今までどれだけ休みを取ろうとがんばっても許してもらえなかったのに……

「どうした？　いらないのか？」

「いいえ！ とんでもない！ 要ります！ 要ります！！ 一年間欲しいです」

「わかった。単位のことは気にしなくて良かったな」

「はい」

思いも余らない先生の言葉に感無量とばかりに涙が出てきそうになるのを抑える。

「カムイ、たまには来いよ。お前を待っている人はたくさんいるのだから」

「了解です。教官」

そうして今年の一年間ぐらい自分の趣味に没頭できることを確信した。

「ただいま」

そう言って入ってきたのは自分の部屋だ。

まあ、別に「ただいま」なんていわなくても良いのだが、久しぶりに言ってみた。

白衣をハンガーにかけてソファへと座る。

そうして体を預け、休憩する。

実質この部屋にすんでいるのは二人なんだけど……ボク以外の一人は常に部屋にこもっている情報科インフォルマの女がいる。

一応はガキからの付き合いなので部屋においてはいるが、なかなか部屋から出てこないので会うことがない。ときどき俺から情報をもらいに行くがそれだけだ。

そのことがボクの変態説を加速しているわけだ。

というかボクは変態じゃないけど、行動が他人と違うだけだ！！今日は気配を消していたから言われなかったけど……結構傷つくんだぞ！！

「遠山キンジ、か」

ふと、今日始めて見た遠山について思い出す。そいつの見た目は確かに格好は良かったが、外見からでは何か特別なものを感じなかった。

けど、僕が本当に知りたいのは……HSS

ふふふ、本当におもしろくなりそうだ。久しぶりに情報をもらいに行くか……

部屋の前に立ち

「遠山キンジ」

「了解」

すこしだけ子供っぽい声だ。そして、これだけで明日の朝にはいつの間にか机の上に資料が置いてある。

「これが……」

机の中に置いていたのは電話帳だった。いや、そう錯覚してしまうほどの分厚い資料だ。

あいつの情報は信憑性が高いものを全て集めてくるので量が必然的に多くなる。

ふん。今日は学校行く暇ないな

そして、資料の読破に時間を割いた。

それにしてもこの資料にある……アリアって誰？

これが本当におもしろい……おもしろいことになるなんて微塵も考えていなかった。

第1話 アリアって誰？（後書き）

どーでした？

緋弾のアリアはキンジの視点が多いので若干むずかしいです。
半分ぐらいはオリジナルになりますのでその辺はよろしく願います。

誤字脱字訂正などありましたらよろしく願います。

第2話 武偵殺し（前書き）

うーん、アニメ見てきました。三回もWW

感想は後書きで～

ではでは第二話となりました、どうぞ

第2話 武偵殺し

第2話

うーん、久しぶりに働いたの。それもこれも——のため……
喜んでくれるかな〜喜んでくれると良いな〜それにしても……
あの人が興味を持つなんて久しぶりだな、しかも男の子、女の子
じゃないだけよかった〜

パソコンのデスクトップが……七、八台はある薄暗く狭い部屋の
中で一人の少女が自分の体を抱きしめるようにもだえていた。それ
も、身をくねらせてもだえている。

容姿は黒髪のみディアムで、少しだけ勝気な目が特徴的な女の子
だった。服装は普通の武偵高校の臙脂色の制服を身にまとっている。
理由は簡単。久しぶりに愛しの彼からの依頼なのだ。そりゃもう
全力で行った。腕が八本に見えるぐらいの勢いで……

そんな彼女に思われている彼はというと……

「まじかよ……」

目の前の光景におどろしていた。目の前のバスが人でパンパンに
なっているのだ。しかも、大粒の雨の追加つきで……

こりゃ……能力でも使用して素早く学校に行くか……

そのために人目の付かない場所へと移動する。

俺の能力使用は血が必要だからあまり人目についてはいけない……

……というか人目につくとめんどくさいのだ。

というわけで人目のつかないところにきたところでリストカットだ。刃物は切れ味抜群のメス。

自分の命が危険にならないように区切りのほうが良いところで出血を止める。これぐらいは血液操作能力を持つ俺にとって赤子の手をひねるぐらいに簡単だ。

『間血泉』以前使った技みたいなもんだ。これは圧縮した血液を使つて強引に体を押し出す。

これを足元と空中に何個か設置して……足りない。血液が足りない。うん……足りない。しかたがないから輸血パックの口を食いちぎりそれも操る。

「血に触れないといけないのが一番めんどくさいんだよね……」

これが能力の限界だ。見ただけで血を操れるのは普通にチートだ。見ただけでは情報をいろいろ把握することが出来るぐらいかな。

簡単に操つたらすぐに内部から爆発させてやるつーの。まったくめんどくさい。

とにかく何とか学校の屋上に着地し、血液を自分の体と輸血パックに戻す。

注：この輸血パックの血は治療に使いません。安心してください。

「ボクは一体誰に了承を取っているんだろうか？ 考えるのもめんどくさい」

貧血状態になっていたので疲れがたまる。丁度先日休暇を取ったばかりなので寝ることにした。もちろん風雨をしのげる場所に行つてだ。

「ホント……めんどくさい」

意識を手放し、目をつぶる。意外と簡単に眠ることが出来た。

「あんた何やってんの？ 起きなさい！」

ガスツ 痛い、誰だボクの頭を蹴るやつは……アリア？

目を開けてみるともう一度蹴ろうと足を振り上げているアリアの姿だった。その可愛いあんよはすでに上げられているので……PN^{バン}ッが見えるわけで……

「か、神崎さん？ なんでそんなに顔を赤くしているんですか？」

「あ、あ、あんたねえ」

自分の現在の状況を理解したのかぶるぶると震えている。それもあんだよを上げながら…それはもう、すぐに振り下ろされるほどに……

「もう一度、寝てなさい!!」

「理不尽すぎるでしょ! どっちかにしてください!!」

ギリギリで屋上の上を転がり、振り下ろされる理不尽という名の鉄槌を回避する。

回避したまではよかったものの、何かがボクのわき腹にあたった。すぐに確認してみると……

「レキじゃん!」

頭を蹴られて下がっていたテンションが復活する。急上昇というやつだ。

素早く立ち上がり、レキの目の前に立つ。そしてメモ帳とペンを取り出し、準備完了。

未だに目をつぶっているレキに自分の存在を認識させるためにヘッドホンを軽く叩く。

「……あなたは」

「久しぶりです。カムイですよ」

軽い調子で挨拶をした。だが、彼女は反応をしなかった。

また銃を向けられると思っていたんだけど……

初対面のときに「あなたは危険です」と言われたので今の彼女の行動には驚いた。

「殺さないの？」

「…今の私にはやるべき事がありますので」

無表情のレキはかすかに視線をアリアへと向ける。もちろん、すぐに戻して目をとじた。

そんなアリアは今無線機にがりたてている。そして気づけばキングが来ていた。

「おゝキング君じゃないか」

「お前、誰？」

初めて話しかけたら第一声がこれだった。正直、死にそうだと
いうか落ち込んでいる。

「まあ、いいか。僕の名前はカムイ。以後よろしく」

「お前が、カムイ！？」

「はい」

キングの顔が僕の名前を聞いた瞬間、驚愕の表情へと変わる。
そんなに有名だっけ？

名前が知れ渡っている理由を脳内で検索してみたが……変態の二
文字しか思いつかなかった。
それってどうよ。

「時間切れね」

急にそう言ったアリアは、くる、と俺たちに振り返る。

そのときだった、携帯のバイブが震える。

そんなに気にすることでもないのでその場で通話ボタンを押した。

『バスジャックが起きました』

この少しだけ子供っぽい声はボクの部屋の居候だ。

名前は……確か……誰だっけ？ 忘れた。まあ、良いか、どうせ……必要ないし……

「へ」

適当に相槌を打ち、アリアたちのにマバタキ信号で『気にするな』と送る。それは何とか理解されたようで、あっちも状況説明フリーフィンクを始めた。

『犯人は武偵殺しです』

「OK。情報を」

『了解なの』

武偵殺しにはいろいろと借り（休日をけが人の治療でつぶされたこと）があるので、今回だけはこのバスジャックを止めることにした。

彼女が出した情報によれば、今回の犯人の武偵殺しは99.9%オリジナルらしい。バスジャックの方法は『減速すると爆発する爆弾』を使用している。先日キングがそれと同じものにチャリジャックにあった。

「場所は？」

『今は台場です』

メスを手に取る。今はこれぐらいが丁度良い。ナイフを出すのはちょっとやりすぎだと思う。

「インカムにまわせ、そっちでナビゲーションを頼む」

『了解なの』

内ポケットに、常備しているインカムを耳につける。

これで準備はOK。狙いはもちろん、武偵殺し。

え？ 完全な逆恨みじゃないか？ 気にするな、俺にとってはささいな問題でしかない。あいつを捕まえて一発分殴る。

『ぶん殴る、と考えていますね』

「あれ？ 何で分かったの」

『勘ですよ。長い付き合いですから』

とはいってもドア越しか、インカム・携帯越しただけ……というツッコミを抑える。

顔を知らない長い付き合いは世界中を探したとしても俺たちだけだと思う。

「ルートはどれが最短距離だ？」

『やっぱり、空か海を突っ切るのが早いです』

それを聞いている間に俺はすでに海へと走り出していた。

第2話 武偵殺し（後書き）

どーでした？

俺が書くSSはありきたりですね〜。と最近になって思います。すこしは原作キャラの視点で書いてみようかな？ オリキャラ無しで……

愚痴はこの辺にしておいて感想です。

悪い評価ばかりでした。原作も見えていないくせに悪い評価ばかり書きやがって……原作はマジでおもしろいんだぞ！

あとは戦闘シーンなのに盛り上がり欠けていたり……監督は最低ですね……

OPは歌は最高なのに、映像がちよっと物足りなかったです。

EDは良かったね。アリアらしくないけど……

「制作会社間違っている！！」sirasu心の叫び。

正直なところレキしか見るところがない！！というかレキがメインヒロインでお願いします！！！！レキ〜早く出てきて〜

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第3話 バスジャック

第3話

「ひゃっほー！」

現在ノリにノっている俺だぜ！！

そんなことを考えているドアホは現在海の上を物凄いスピードで滑っている？

なぜ疑問系かというと……分からないからだ。だって海の上を赤い板に乗って高速で移動しているのを何と説明すればのか……

『もつと右ですよ』

「了解だ」

軽く暴走気味なカムイを一人の少女がナビゲーションしている。

そのためギリギリバスジャックを追っている状況だ。

そうしてやっと陸地が見えてきたところで、カムイの血液能力の裏話を紹介しておこう。

血液というのは、古代とはいえ海水に似ている。よってカムイの血液操作能力は、微量ながら有効。今現在行っていることは血液と海面の摩擦をゼロにすることで、高速での移動を可能にしている。

そんな荒技をしているカムイは陸地がある程度近づいてきたところで跳躍、そして着地した。

「道は？」

「真っ直ぐ」

ナビゲーションにしたがってカムイは走り出していた。いや、滑っていた。

武偵殺しは毎回乗り物に爆弾を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールをする。そうして何人も殺してきた。それに伴って大量のけが人も作った。

武帝殺しの犯人は捕まったと報道されたが、あれは嘘だった。居候の情報を警察に届けて捕まえてもらったというのに、違う尻尾をつかまされていた。

それから一度は収まった武偵殺しの事件だったが、最近になって復活。そして、何人もの犠牲者を出した。

ここまではよかった。俺が動く理由もないはずだった。しかし、俺の休暇を狙っているかのようにけが人が運ばれてくる、それも武偵殺しの事件のけが人だ。

「次こそは必ず、しとめてやる」

『はい、次は逃がしません。今度こそ、私の名にかけて』

居候はあれでも一流の情報屋だ。武偵高校のランクもBとなつて
いるが、それは自分の身を守るために先生たちに交渉した結果だ。
そのときに使った資料が……政治家の汚職についての資料だった。
それも確実なもので数十人もの資料で先生たちを納得させたとか何

とか。

そんな居候は実質Sランクだ。しかし、そんな居候をだましたのが武偵殺しのオリジナル。

武偵殺しには二人とも恨みがあるのだ。

『次の角、右にジャックされたバスが通ります。……………ちょっと、待ってください』

「どうした？」

普段のナビゲーションしているときとは違う雰囲気を感じ取った。

『いすゞ・エルガミオの後方に無人のルノー・スポール・スパイダーを発見しました。色は赤なの』

この辺のありとあらゆる監視カメラにハッキングしているだろう居候がそう告げる。

「なんだそれ？」

興味ない車の車種を言われたところでなんのことかさっぱりわからない。

『オープンカーです！　少しは覚えてください！！』

「知らん、興味ないことは覚ええない。記憶の無駄だ」

『う〜〜〜、もう良いです。それよりもあと十秒ぐらいですよ』

目視でも確認できるほどバスは近づいている。俺がバスに飛び移

ろうと体制を低くしたときだった。

バリバリバリッ！

無人のオープンカーの座席からUZI（短機関銃）を発砲した。すでに合流していたキンジはその銃弾を受けたのか窓から乗り出していた体を強引に車内へ戻された。

あれ？ もしかしてキンジ達と目的一緒？

ただ、今の俺にはそんなことを考えている時間はなかった。すごいスピードで突っ込んでくるバスの入り口に向かってメスを二、三本投げつけ強化ガラスを割り、飛び込む。入った瞬間にバスに体を思いつきりぶつけたが、すぐに体勢を立て直す。そうして俺が最初に見たものは……

「おい、おっさん。大丈夫か！？」

運転手のおっさんが肩に被弾しているところだった。

現在の俺はメスを握っている。このときにできることは……

・治療が出来る

・戦闘能力・身体能力が通常時の2倍（普段が本当に弱すぎるため）

・能力使用可能

・五感が鋭くなる

欠点として……

・非常に傷を見ると治療しなくなる

というわけで、俺は今運転手の傷を治療している。環境はよくないが、今は最善のことをするまでだ。

自前緊急治療セット（といっても結構本格的）のアルコールの消毒液で指を消毒し、指を血液に触れさせた。それですぐに運転手の血液を掌握することに成功、そして無理をさせない程度に生体情報バイタルサインに注意しつつ、血で弾丸を押し出した。

「む、武藤！ 運転を代われ！ 減速させるな！」

キンジも今の事態を收拾するために声を張り上げていた。
俺もゆれる車内の中、ガーゼで傷口を覆い包帯を巻きつけ終えていた。

「キンジ！ 情報を！」

「え？ あ、ああ、分かった」

俺が救護科のことを知っているのか、キンジは一瞬だけ躊躇した
が教えてくれた。

インカムで居候がぎゃあぎゃあと騒いでいるが、いくら信頼して
いる情報屋とはいえ現場の情報が一番だ。

バスに仕掛けられている爆弾はC4（プラスチック爆弾）、それ
も電車でも吹き飛ばせるような炸薬量。

アリアも現場にいるはずだが現在は不明。通信も途切れている。
そして都心に向かっている。

思ってたよりも最悪のシチュエーションだった。

「……最悪」

無意識にそうつぶやいてしまうほど最悪だ。

バスはレインボーブリッジへ高速で入っていく。
警視庁の手回しのおかげで通行は止まっていた。

「おいアリア、大丈夫か！」

不意にキンジがそう言う。キンジはいつの間にかバスの屋根に上
っていた。

何をしているんだ？ 危ないのに！！

ゆるる車内の中、キンジに危ないと告げようと全力でバスの中を移動するがうまく進むことが出来ない。

「何やってんのバカっ！」

直後——バチッバチッ！！ 被弾音が二つ。

誰かが銃弾に当たった音を聞き、反射で内ポケットに常備しているメスを二本引き抜き、窓に向かって投げつける。一本はガラスを割るため、そしてもう一本はＵＺＩの銃口を狙って。

ＵＺＩは見事に破壊された。屋根の上で必死になって「アリアッ！」と叫んでいるキンジの声が聞こえる。

パァン！ パァン！

二発の破裂音があたりに響き、赤のオープンカーがスピン。そして、爆発した。

よく窓を見てみるとヘリがバスに併走していた。そこには膝立ちでドラグニコフを構えているレキが……そしてこの雨の中鋭くなっている俺の聴覚が一つの詩を聞き取った。

「私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目標に向かって飛ぶだけ」

一度だけ聞いたことのある、レキの詩。俺の心臓を打ちぬいたときも言っていた詩。

ドラグニコフが三度光り、バスに着弾した衝撃が伝わる。

ガンッ、ガンガラン、とバスから落ちて背後の道路に転がっていき、爆弾。

「私は一発の銃弾」

再度レキの詩を聞き取った後、響く銃声。放たれた弾丸は爆弾に

当たり、海の中へ……

ドウウウウッー！

遠隔操作によって爆発させられたのか、海中から大きな水柱が上がった。

「くそっ！　今回も逃げられた」

『ごめんなさい……』

「お前が謝ることじゃない。あゝもう、むしゃくしゃするー！」

翌日、携帯に耳を当てながら、ボクは病院へと向かっていた。

バスジャックの後、居候は武偵殺しが使っていたホテルを調べたが、外部から情報を改ざんされていた。

やれば出来る、と彼女は言っていたがボクがそれを止めた。これ以上首を突っ込んでしまえば、警戒されてしまう恐れがあるからだ。だからこそ、次のチャンスに必ずしとめるためボク達は情報を集めていた。

携帯の電源を切り、病院の中に入る。もちろん武偵病院だ。ボクは先生に見つからないように神崎さんの病室へと足を運んだ。ここ
の職員に聞いた話だとおでこに消えない傷が出来たらしい。

それを治せるのかどうかを見に来ただけど……

「な、何よ……何なのよっ」

「お前には関係ないだろ！」

修羅場でした。修羅場ってました。修羅場なんですね。

まっ、この話はいつでも出来るから良いか。今は話せる状態じゃないさそうだ。

そうして、バスジャックの一件は終わった。しかし、『武偵殺し』は終わっていない……

第3話 バスジャック（後書き）

どーでした？

レキは最高だぜー！

「私は一発の銃弾」このセリフ現在FPSで使ってます。レキになりたくてww

ほぼ徹夜の突貫だったので読みにくかったらすいません。

誤字脱字訂正などありましたらよろしくおねがいします。

第4話 真実

第4話

「本当の話なんだね？」

『私を信用しないんですね？』

「何年一緒にいると思っっているんだ？」

『わかっていますよ』

ボクが今手にしている資料はアリアとキンジのだ。

アリアのは母親の罪について、キンジのは金一についての資料だ。

アリアの母親…神埼 かなえは『武偵殺し』の容疑者として捕ま
えられている。

「ねえ？」

『なんですか？』

「ボクたちのせいじゃないよな」

『はい。しかし、多少は関係しています』

「それなら良い」

ボクたちの……いや、居候の情報がこんなことになっているなん

て……オリジナル絶対に捕まえてやる。

現在のかなえさんの量刑は……864年。簡単に言えば終身刑だ。しかも罪状は『武偵殺し』だけでなく大量の罪がかぶせられていた。

かなえさんをたくさんの冤罪から救うためには、最高裁までにきちんとした証拠または真犯人を捕まえないければならない。

そんなアリアは今日、イギリスへと帰るらしい。

「よし、これにボクたちも関わっていることだし、少しぐらい助けてやりたいです」

『日本語おかしいですよ』

「簡単に言えば、助けてやりたいんだよ」

『わかりました。調べておきますね』

これでアリアについての資料は終了。続いてキンジ。

キンジの兄弟、遠山 金一についてだ。

遠山 金一は優秀な武偵だ。受けた依頼を完璧に達成し、その上彼も国際の医療免許を持っており、依頼を受け世界中を飛び回っては各地で治療行為を行ったりと活躍はとてすごかった。

そんな彼をキンジは尊敬していた。尊敬していたからこそキンジは武偵になったようだ。

しかし、そんな彼は去年の『浦賀沖海難事故』で行方不明となっている。

日本船籍のクルージング船・アンベリール号が沈没し、遠山 金一は見つからなかった事件。

その後、クルージング・イベント会社が、乗客からの起訴を恐れ

て非難した。それと一部の乗客からもだ。

遠山 金一は、乗員・乗客を全て非難させ、そのせいで逃げ遅れてしまったらしい。

「悲しいね」

『はい』

「ふー、これでキンジが武偵をやめる、と」

『そう言うことになりますね』

「OK。この件についてもボクたちが行動しよう。彼は生きている」

『情報を集めますね』

「……シージャック」

浦賀沖海難事故、それはボクが持っている『武偵殺し』の資料の中にあった『可能性事件』の一つだ。『可能性事件』というのは、表は事故となっているが、隠蔽工作で分からなくなっている事件のこと。無論、居候も知っている。

『武偵殺し』は浦賀沖海難事故でシージャックをしていた。遠山金一の能力から考えてこの程度の事件で死ぬわけがないのだ。だから『武偵殺し』が直接手を下した、それがボクの推理だ。

ん？ 待てよ…………… まずい、これはまずいぞ
持っている情報が最悪の結末を示していた。

「アリアは今どこだ！..」

『武偵殺し』のオリジナルが起こした事件は5つ。チャリ・バイク・自動車・バス・船だ。これを起きた順番に並べると、バイク・自動車・船・チャリ・バスの順。

小さいものから大きなものへなっていたが、キンジのときに一度小さくなってまた、大きくなっている。しかも、三度目の船で遠山金一を倒した。

これはアリアに対する挑戦のつもりなのだろう、三度目の事件で武偵を殺すために……アリアという名のSランク武偵を殺すために。

というわけでボクは現在、ボーディングブリッジを駆け抜けていた。

ハッチの数十メートルあたりで物凄い表情で必死になって前を走っているキンジに並ぶ。

「キンジ、君も気づいたの？」

「カムイ！？ まさか、お前も？」

「そゆこと」

二人して仲良く併走していたが、目の前でハッチを閉じつつあるANA600便を見てキンジを先頭にして最後の加速。

バタンツ。キンジ、ボクの順番で何とか中に入った後、後でハッチが閉まる音がした。

「――武偵だ！ 離陸を中止しろっ！」

「武偵です。離陸するのを今すぐやめてください」

武偵高校の生徒手帳にある、「武偵」のあかしを突きつける。

「お、お客様」説明している暇はない！ 早く止めて！」「は、はい」

ボクたちに目を丸くしているフライトアテンダントの言葉をさえぎった。それにびびったのか、すぐにフライトアテンダントは駆けていった。

隣ではキンジが膝を折って座り込んでいた。呼吸も荒い。

「疲れたのか？」

「なんで、お前はそんなにびんびんしてんだよ」

確かにボクはあまり息切れを起こしていない。

「医者にも体力が必要だから」

徹夜とか多いしね、と付け加えてようやく理解してもらった。ぐらり。

機体が揺れた。

止められなかったか……

「あ、あのダメでしたあ。」

「ば、バッカヤロウ……！」

二階から走って降りてきたアテンダントはがくがくと震えながらそう話した。

そんな一般人になんて興味がなかったボクはすぐに作戦を切り替えた。

「先に言ってるね」

「え？ あ…おい！」

後からボクをとめようとするキンジの声が聞こえたが、それを無視して奥へと進んでいった。

トイレに到着したボクはすぐに携帯を開いた。別にトイレじゃないと使えないわけでもないが、見つかるといういろいろ面倒だし、人に聞かれても困るのでトイレで使うことにした。

数回コールがなった後、ようやく居候が電話に出た。

「最悪なパターンだ」

『わかっています』

あちらはあちらでボクたちの行動を見ていたようだ。

「ボクはこのまま武偵殺しを捕まえる」

『そう言うと思っていましたよ』

長い付き合いだからなのだろうか、いつもいつもこいつには俺の行動が筒抜けになっている。それがこいつに興味を持っていること

だ。

『ですから、先生に提出する資料は任せておいてくださいね』

「サンキュー。よろしく」

『武運を祈ります』

そして通話を終了する。ボクは今、たぶん不審者としてこの機体の中にいるのだろう。キンジがちゃんとボクのことを説明してくれる良いんだけど……。

そう言う感じになっているので、『武偵殺し』を探すために動き回るのも危険なので相手のアクションを窺うことにした。

そうして数分が経ち、この飛行機は東京湾上空に出た頃だった。
パン！ パアン！

空中に浮いている飛行機の中から銃声が響いた。

「さて、動こう」

長い白衣を翻し、ボクはトイレを後にした。
かつこ悪いとか思わないでくれ……

第5話 対決 リュパン四世

第5話

トイレから出た通路の先——コクピットの扉が開け放たれていた。そこには…さっきの間抜けなアテンダントだった。

しまった。あいつだったのか…あまりの馬鹿さ加減に調べるのをやめたやつだった…

小柄な身長彼女は一人でずりずりと機長と副操縦士を引きずり出していた。

もちろん、その二人のパイロットはまったく動かない。

その様子を見ていたのか個室の扉から、キンジが銃を抜き出して向けた。

「——動くな！」

そんなことをしているキンジの後からゆっくりと近づいていく。

「動かないでね」

肩をつかみ部屋に強引に入れる。

アテンダントはボクたちを確認したところで、にいつ、と馬鹿そうな顔を歪めさせた。

「Attention please. でやがります」

ピン、と音を立てて胸元から出してきたカンを放り投げた。

「——みんな部屋に戻れ！ ドアを閉めろ！」

キンジはそう言っただけ扉を急に閉め部屋にこもった。ボクは一応白衣で口元を覆う。

キンジめ！　ボクを見捨てたな！？

ガスのにおいをかぎ、毒かどうかを調べたが毒ではなさそうだった。え、毒だったとしてもすぐに解毒できるのだが……

内ポケットからグロックを抜き出して、コクピットに接近する。

「動かないで」

そう言っただけコクピットの扉を開けた。

そこではアテンダントが銃をボクに向けていた。

「あれに引つかからなかったんですね」

「そんな話し方はやめて、知り合いじゃないか」

隠し事が苦手な彼女はワルサーのトリガーにかけている指がかすかに動く。

「……峰　理子。いや、理子・峰・リュパン4世」

それを聞いた瞬間に目つきが変わる。

「なんでわかったのかな……」

「優秀な情報屋がいるのですね」

ふふ、と笑うアテンダント。しかし、その手に握っている銃は確実に眉間を確実に捉えている。

お互いを見つめあい、数秒がたった。

「勝てると思ってんのか？」

男の口調でしゃべりだした理子。

理子にもボクと同じ戦う時に性格が変わるのかな？

「まず無理だと思うよ、今の段階ではね」

銃を持ったとしても、ボクの戦闘力は上がらない。ならどうしてメスじゃなくて銃を持ってるのかって？ 簡単な話だ。メスを持つて入ろうとすると扉の前に倒れていたパイロットを治療してしまうから。

今なら握っても大丈夫だから、内ポケットからメスを抜き出そうとして腕を動かすが……

「動くな」

さすがに警戒されているか……

一度ボクは理子と戦ったことがあるが、そのときよりは強くなっているようだ。正直言つて隙がない。

「そして今はお前と時間をつぶしている暇はない」

急にそう言った理子の髪が動く、ツーサイドアップテールの先で何かが爆ぜた。強烈な閃光が目を襲い、視界をさえぎる。

しまった、スタンか……

遅かった。もっと早く気づいていれば対処できたかもしれないが、今はそんなことを考えている場合ではない。

何とか視界を確保しようとまばたきをするが、効果はない。

メスを取ろうかと思ったが、内ポケットの中で握った瞬間に理子
がないことが分かった。すぐに手を離して目の回復に専念した。

「はあ、成長したね……それとも俺がだらけすぎたのか……」

視界が開けてきたところで辺りを見回してコクピットを確認する
が、すでにコンとロールはどこかに——たぶん理子がイジって遠隔
操作を可能にしているのだろう。

さつさとコクピット内から出たいのだが……

「この揺れじゃあな……」

さつきから右に左に揺れてばかりでうまく前に進めない。

メスを抜けば良いんだろうが、目の前には倒れているパイロット
が……ナイフを抜いてもいいのだが……狭すぎる。こんな密閉空間
だった場合すぐに切り刻んでしまうだろう。

ここで、ナイフを持った場合を説明しておくでしょう。

・はつきり言って一番危険。すぐになんでも切り刻んでしまう。

・常にアドレナリンのせいで痛覚麻痺

・ただし戦闘能力はメスを持っているときの……ざっと数十倍……

・気分によるところが大きく、ムラがある。

こんな感じなのであまり持ちたくないのだよ、過去に三人に使っ
ているけどね。レキのときが一番危なかった……殺してしまうかも
しれなかった……

急に揺れが収まったのでコクピットから出た。
体中を壁にぶつけまくったので普通に痛い。
そこにはアリアを抱えたキンジが走っていた。

「どうした——ッッ！」

どうしたの、と言い切る前にアリアの側頭部から血が出ていた。
ボクの能力——血液操作能力が自然と発動し、アリアの状態を確認する。

「カムイか!! 早く手当てを!!」

「わかっているよ」

必死の形相で助けを求めるキンジを落ち着ける。実際はアリアの状態はそんなに良くない。

けど、大丈夫と言って強引に落ち着けた。

側頭動脈が切れている、か……

簡易救急セットを取り出して血に触れる。すぐに血を操って体内に戻し、包帯をきつめに巻きつける。

「これで一応は大丈夫だけど、戦う気だよね？」

「それしか、方法が……」

理子が敵になったことに相当まいつているようだ。

武偵のくせにやさしすぎるな……

致命的な欠陥でもあるが、彼の良いところは確実にそこなので口に出さなかった。

そんな彼——キンジは武偵手帳からラッツォを取り出す。

『ラッツォRazzzo』 アドレナリンとモルヒネを組み合わせたような
感じの復活薬だ。

医者である立場から言わせて貰うと、正直体に悪すぎる。

「ここだ」

目の前で心臓の位置を探していたキンジに正確な場所を教えてあげる。

ぶつぶ、とバイブが震える。あいつからだった。

キンジ達を二人きりにするようなことはしたくなかったが、仕方がないのでコクピットに移動することにした。

もう何度目のコールだろうか、コクピット内に付いたのでようやく通話ボタンを押すことが出来た。

「どうしたの」

『いえ、大変なことになっているので安否の確認を、と』

「ボクは大丈夫だよ。ただし、アリアが負傷中。治療の用意をしていてね」

『了解なの。……気をつけてくださいね』

「心配してくれてるんだ……ありがとね〜」

と、電話を切る。

さてと、何をしようか……まあ、まずは理子を倒すか……
 Bannon!

「！！！」

一発の銃声が聞こえた。本能的に音がした方向を向いて走り出す。しかし、銃声の直前にぐらり、と大きく揺れていたためうまく移動することが出来ない。

機械には疎いからな

操縦桿の下に何かがついていることは分かっているのだが、正直な話…機械が本当に苦手なのだ。

テレビを直すには叩けば良い、というレベルだ。もちろん、銃にも弱い。今もっているグロックはわりとましなのだが、他の銃になると……赤ちゃんレベル。

何も出来ないふがいなさに、はあ、とため息をつき移動を再開する。

その間にもう一度大きく揺れて、体が壁にぶつかった。

「もう、ホントやめてくれ」

たぶん理子にそう言ったつもりなのだろう。

絶対恨んでやる！！

ドウツツツ！！！！

あれ？　なんだ爆発音じゃないか……て、えっ？　新しいボク的能力か？　いや、別に爆発しろ！！と念じたわけじゃないぞ。本当だぞ。

そして空気にボクは引っ張られた。

第5話 対決 リュパン四世（後書き）

やっと終わった。アリアの一卷分を書き終わった、と言う意味です。

明日は五時ごろに更新します。

それ以降の投稿はまだ決まっていません。

もう一つのやつを書いて言う途中でちまちまと書いていこうと思うので、待っていてくださるとうれしいです。

第6話 飛行機を止める！（前書き）

五時ぐらいに投稿すると言っておきながら、この体たらく・・・

すいません。本当にすいません。約束を守ることしかとりえがないのに・・・

とにかく、第6話です。どうぞ

第6話 飛行機を止める！

第6話

「おわあああああ！！！」

ちつきしょう！！ キンジのやつ仲間より自分の命を守ったな！！
カムイは突如爆発した飛行機の壁から気圧の違いにより吸い込まれて……外へ……

その途中でキンジと目が合ったが彼は必死でイスに捕まっていたので、ボクは普通にスルーされることになった。

「ハハハ」

もう、乾いた笑い声しか出ない。

ボクの体が空気を切って落ちている。

さて、どうしてやるうか……

気づけば、目の前からミサイルが来ていた。

切ろうと思えば切れるんだけど……なっ？ 僕今落ちてるじゃん？
切ったら切ったで物凄いいことしちゃうと思うんですね……

「まあ、良いか」

今回はメスではなくナイフを手につ。精神が研ぎ澄まされる感覚がして、さらに高揚する。

高速で飛来してきた物体に向かってナイフを振るう。もちろん、刃が届くことはないが…音速を超えた切っ先は衝撃波を生む。それによって発生した衝撃波は容易にミサイルを切り裂いた。それも真つ二つに…

ドドオオオオオツツ！！！！
ミサイルは爆発した。

そう、この状態では物事を良く考えることが出来ない。
信管を破壊せずにミサイルの方向を変えることができるが、この状態ではそんなことよりも派手さを重視してしまうので、こういった状況によくなってしまうのだ。

「きたねえ花火だ」

某有名惑星王子様の気持ちは今なら良くわかる。

本当に良くわかる。人類が作り出した戦争の道具が作り出した光など心打つものが何もなかった。

爆風が体を襲うが、それを気にせずに白衣の中から輸血パックを探す。

「ねえな」

どこかで落としたのだろうか、いくら探しても存在することがない輸血パックの搜索を諦め、手首の動脈、首の頸動脈を切った。

空中に浮いた血液を白衣に染み込ませるように操り、全体に染み渡ったところで出血を止めて傷口をふさぐ。

血に染まった白衣は間接的に能力によって操ることが出来るので、白衣をパラシュートの代わりに広げて風を受けさせた。

そして、飛行機を見ながら……

「あちゃー」

どういう事なのかは分からないが、たぶんミサイルの破片がエンジンに当たったのだらう。いつの間にか飛行機のエンジン、四基のうち二基が破壊されていた。

しかも、燃料が盛大に漏れている。

「おい、居候」

素早く携帯を取り出し、居候にかける。

『居候って何ですか！？』

「黙れ居候。今はそんな場合じゃないんだ」

『何かあつたんですか？』

俺の意図に気づいたのだろう。居候も真剣な声に変わった。
物分りが良い人は本当に役に立つ。

「ANA600便についての、資料を今すぐ教える。特に燃料機系統についてだ」

『了解なの。少しだけ待ってください』

携帯の中からはカタカタカタとキーボードを叩く音が聞こえる。
毎回思うけど居候ってどうやって調べているんだ？ まえに一度
だけ聞いたことがあえるけど……「秘密です」と言われた。

その後も何回か聞いたことがあるけど、結局教えてくれなさそう
なので諦めたのだ。

『見つけました。そのB737-350の燃料は内側の二基のエンジンに燃料系の門があります。燃料漏れしているんですよ？』

「そっちで確認できてるだろ？」

『現場での情報が一番です』

「ふん、まあ良いだろう。現在盛大に漏れている」

百人に聞いても全員が同じように答えるだろう。
それほど漏れている。

『それじゃあ、もう無理ですね。もう漏れっぱなし決定ですので、諦めてください』

「んじゃ、俺は理子を追うか」

目下逃亡中の理子を追うことにした。

空中で体の上下を逆転させ、白衣を閉じた。
命がけの行動だけどパラシュートを使っている理子よりは速い。

「待とうか、リュパン」

「待てといわれて待つわけがないだろうが！」

パン！

どこに隠し持っていたのか良くわからないが、手に持った銃から
銃弾が放たれる。

「そんなもの」

ギーン！

手に持ったナイフで銃弾を引き裂き、白衣の中からグロックを引き
抜く。

いくら苦手分野だろうが、この状態では関係ない。百発百中だ。
と、言ったものの……どこを狙えば良いんだ？

下着姿の理子を撃つにも怪我をさせるだけだし、パラシュートを撃てば落ちるだけ……どこをどう撃つても最悪な状況になるだけだったので理子の手の中にある銃を打ち落とした。

「くそっ」

男口調の理子は悔しげにない銃を掴もうと何度か手を握ったが、すぐにこちらをにらみつけた。

俺はすでに目と鼻の先にいる理子を捕まえようと手を伸ばすが、そんなところで限界が来た。

近づいてくる地面が目に入ったからだ。これ以上はさすがに無理なので能力でスピードを落とそうとしたが無理だった。

能力で体を浮かせることなんて出来ないで、落ちるしかない。そうして、ついに理子を抜いてしまう。

普通に近づいてくる地面、本能が危険だと告げるがもうどうすることも出来ない。

「馬鹿め」

男口調の理子がそうつぶやいた。

悔しいが理子の言うとおりこのままのスピードで地面にぶつかれば、ただ事ではすまない。

予想だが確実にあの世にいけるだろう。
けどな……

「出来ないことなんてあるはずがない！」

この状態なら出来る。わけの分からない根拠がそこにあった。

地面に着地した瞬間に能力をフルに使い、体を強引に前に曲げた。いわゆる、受身だ。

何度も何度も前回りを高速で決めて、勢いが弱まったところで立った。

「……出来たな」

自分でも半信半疑だったので、出来た自分に素直に驚いた。

体中——主に背中が痛いがちょっとした打撲ですんだので、気にするようなことでもない。なのですぐに理子を探そうと辺りを見回したが…

「またか」

すでにその場に理子はいなかった。

必要のなくなったナイフを戻して舌打ちをし、携帯を取り出す。

『逃がしましたね』

「……………」

ボクが一言目を発するよりも早く、居候がそう告げた。

何で知ってたんだよ

そんなボクの疑問を無視するがごとく、居候は続ける。

『今からでも追えますが、今は戻ってきてください。キンジさんたちメガフロートが北側の人工島に着陸しようとしています』

普通なら誰もが思いつかないだろう発想に驚いた。ボクの話を見無視することと、キンジの行動だ。

『マスターズ
教師科からの依頼です。飛行機をとめてください』

「そんな依頼は受けてないな」

どうでも良いほどもんどくさかったので、たぶらかそうとしたが

……

『私がすでに受けています。と言うか、名指しだったので断るわけにもいきませんし……』

「はいはい、わかりましたよ。断ったら単位が減るんだろ？ 受けるしかないじゃないか」

別に何回も卒業できるほどの単位をためているが、マスターズの依頼を断ったら……先生が勝手に——気分で——減らす単位を決めるので、下手したら一気に削られてしまう可能性がある。

無論、そんなことにはなりたくはない。

『では、そこから左に移動してください。すぐに海に出ると思います。ちなみにインカムをつけてくださいね』

インカムをつけて、海に向かって走り出す。

居候の言ったとおりすぐに海が見えてきたので、血に染まった白衣を海に投げつけた。

『飛行機は今、向かっている途中なのでがんばってくださいね』

「完全に人事だよな？　へー飛行機に勝て、と？　無理でしょ、無理かも、無理だし」

『出来ないことなんてあるはずがない！　ですよね？』

どこまで知ってたんだよ。携帯はつなげてないはずだけど……
本当にこいつの情報網はどうなっているんだ？

考えてくるたびに怖くなってきたので、さっさと行くことにした。
だから、血に染まった白衣に乗る。

「やっとだ。やっと追いついた」

全力……と言っても、バランスを取ってただけだけど……何とか飛行機に追いついた。

メガフロートの周りにはボクたちのクラスがボートに乗って懐中電灯を振っていた。

はたから見ると南下のコンサートにしか見えないが、そんな生ぬるい状況じゃない。

すでに飛行機が見えている。

そういえば………どうやって止めるんだろう？　輸血パックすら持っていないし………足りないよね？　血液が………

『用意しておきました。費用はあなた持ちなのでガンガン使ってくださいよ』

「そりゃね。俺の金を勝手に使いやがって………」

4リットルで二万弱だ。

あたりを見渡していてようやく見つけた輸血パックの……山？
見た感じ、数十個ある。

えーと、二万×数十で……百万単位ですか？

無駄に出来ない！ そんな気持ちが生まれた気がする。メスを取って自分の血をつけて投げようとするが……むちゃくちゃもったいない気持ちが生まれて一瞬ためらった。

「どうにでもなりやがれ！！」

思い切ってメスを投げつける。

さようなら、俺の年収五十分の一！ 絶対に請求してやるからな

！！

注：カムイはとつてもけちです。

血のついたメスで輸血パックを貫き、全てを能力の制御下においた。

それらを全て操って二つの巨大な釘にする。

飛行機が着陸した瞬間に羽に突き刺す。

『子供が見たらトラウマになりそうですね』

「うるせえ！ 集中を乱そうとすんな」

確かに居候の言うとおりR指定がかかりそうな感じだけど、今はしかたがない、釘を刺したまま液状に戻して固まらせる。

ベツちよりと付着した血液は飛行機と地面をくつつけた。

がりがりと言音を出して削れていくが、飛行機のスピードは徐々に落ちていつている。

最後に軽く風力発電の柱に当たって止まった。

「請求書よろしく、送りつけ先はキンジとアリアで」

独り言のように居候にそう言って、事件は一件落着いたがキンジにはまだまだ気を抜けない日が続きそうだ。

第6話外伝 裏の家系

第7話

ボクの名前はカムイ。しかし、それは本当の名前ではない。ボクの家系は裏の家系だ。ボクの家系の当主は代々、カムイと言う名を受け継ぐのだ。それは居候の彼女も例外ではない。

「居候の意味を教えてください」

深夜の暗い部屋の中で、飛行機を全力でとめた英雄をこの扱いにしているのは、部屋から出てきた居候だった。黒髪のみディラムで、少しだけ勝気な目が特徴的だった。素直に可愛い、そう思う。だけど、今は……少しだけ怖くもある。

「気にするなよ。別に良いじゃないか…」

どうせ、あのときのボクのせいだしな。と、自分で勝手に納得して背を向ける。

「良くないです!」

「良い」

実際にボクは、彼女の名前を忘れている。いや、正確に言うところから忘れたのだ。彼女はボクの四親等に当たる人——いわゆる、いとこだ。正直、幼い頃から付き合いのあった彼女の名前を忘れたのは難しかった。しかし、忘れないといけなかったのだ。忘れないければ、危険が及んでいはずだった。ボク達は裏の家系、記録に残らない仕事等を専門的に扱う家系で、ボクは殺し屋、彼女は情報屋として育てられた。いくら、表の職業が医者だからと言っても、絶対にはれないとは限らない。

だから、少しでも危険は避けたいのだ。

「良くない！」

「良いつて言ってるだろうが！」

ビシッ、とメスが彼女の顔の横を通り、後ろの壁に突き刺さった。はじめをつけなければいけないのだ。本当なら彼女を俺の近くに置くべきではない。俺の情報は良く知られていて、彼女は知られていない。しかし、狙われる危険性があるのだ。

俺はすでに数え切れないほど人を殺している。それも、全ての依頼に彼女の情報が関わっている。そのことがもし、ばれてしまったら……

だから……ボクは……

「忘れたんだ、もう……」

「ふ、ふざけないでください！」

「ふざけてなんかいない。…思い出したくもないんだ」

その目に涙をためた彼女はダツと駆け出して、自分の部屋の扉を強く閉じた。

お前のためなんだ。お前には興味があるし、死んで欲しくない。そして、守らなければならない対象なのだ。

彼女は知っているはずなのに…

Sランク——それは『一人で特殊部隊一個中隊と同等の戦闘力を有する』という意味がある。ただし、強襲科^{アサルト}限定で、だ。救護科^{アシスト}のカムイには関係ない話だが、彼は強襲科のSランクに匹敵する。もしかしたら、とつくに超えているかもしれない。しかし、そんな彼には一つだけ秘密がある。自らの両親を殺した罪だ。

『父さん、母さん、ごめんなさい』

そして、父さんのベッドの近くにあった黒き刃を持つナイフをその手に持つ。

『だけど、俺は殺す。そして、受け継ぐ…カムイの名前を』

心が痛んだ。しかし、これからの俺には情は必要ない。これが、俺の家系。それと、俺が受け継ぐべきものののだ。これが……この家の家訓や罪、そして家系をカムイの名前と共に受け継ぐのがこの家の習わし。親を殺すと同時に心を捨て、家の発展に尽くすために——そう言う意味合いがある。

今のボクはそんなことを考えていないけどね

『さようなら』

それが、俺からの最後の言葉だ。痛みを感じさせないように、と一撃で殺した。たぶん、痛みを感じなかったはずだ。

そして、この後リユパン四世と対面し彼女に興味を持った。

ボクは家を守るために居候の名前を忘れたんだ。真名も仮の名前も忘れた。

ちなみに、心を捨てずに家をついだ理由は唯一つ、ボクの代で終わらせるためだ。これ以上、子供に

親を殺させてはいけない。そう思ったからだ。

けど、ボクの両親は……何を思いながらボクに殺しの技と医学を教えるのだろうか？

不思議でたまらなかった。

これも興味対象かな

真っ黒な夜空に孤独に輝いている月に誓う。理解されなくてもか

まわらない、
守るためならな
……

第6話外伝 裏の家系（後書き）

うん、これでよかったかな。いや、これで良い。

一人で勝手に納得しています。思いつきりオリジナル設定なので、あしからず〜

誤字脱字停止などありましたらよろしくお願いします。

第7話 コウノトリが運んでくれるんだよ。(前書き)

さて、今日から一週間ほどで二間を更新したいと思います。

第7話 コウノトリが運んでくれるんだよ。

第7話

今日は静かだ。居候が動いている音がしない。いつもなら、カタカタ、とキーボードを叩く音が聞こえてくるが、今日は聞こえなかった。

後悔はもちろんしている。それどころかしないはずなんてないのだけれど……

ま、あれで良い。あれが良い。ボクと居候の関係なんてあの状態が一番良いのだ。居候が少しでもボクのそばに来てしまえば、狙われる可能性が高くなる。ボクが居候に近づいても同じだ。

だから、ボクは何も言わずに登校した。

いつもどおりの通学路。何の変哲もない。しかし、心はブルー。澄み切った空の色ではなく、にこりに、にこっている。

そのせいだろうか？ 今は何にも興味がわかない。

「今日は……授業を受けよう」

一人でそう呟いて、教室へと向かった。

アンビュラス
救護科は、これといった授業などは存在しない。そもそも、授業は中学生のうちに終わっていることになっている。高校生ではすぐに武偵病院に入っているぐらいだ。

たぶん、武偵高校の中でも一番自立しているのは救護科だ。アンビュラスそれだけ、入試も厳しいけどね。

さて、ここは教室。当たり前のことだけど、誰もいない。二年生になった今、ほとんどの生徒が自分の個室を確保しているのでそこ

に行っているのだろう。

個室とは、一種の診察室のようなものだと思ってもらってかまわない。

ちなみに、ボクの個室もきちんとある。ボクのうわさを知っているこの高校の学生は利用しないが……

またまた、ちなみにだけど。この救護科、アンビュラス実は容姿もある程度は必要だ。どんなに腕が悪かろうが、顔がよければそれだけで訪れる人数が違う。どれだけ腕が良くても、顔が残念では人が来ないのだ。理不尽な世の中だね。けど、最終的には経験をつんだ人のほうが、はるかに腕前がよくなるので、結構理になつていたりもする。

そして、個室。教室に一度寄つたのは、カバンを置くためだ。

診察室のようなもので、一通りの薬も置いてあるし、診察用のベッドもある。無論、見渡す限り白ばかりだ。何度きても同じ風景なおで、若干のあきが来ているのは先生たちには内緒だ。

机の前にある椅子に思いつきり体を預けて、両足を机の上にのせて脚を組む。

「あー」とやる気のない声が出るのは、いつもどおりだ。そして、患者が来ないのも当たり前なので寝る。

瞳を閉じて、意識を手放そうとしたときだった。

「カムイツー!!」

僕の名前が呼ばれる。このアニメ声は確か……

「誰？」

脳内の記憶媒体の中にはきろくされていないこえだった。しかし、一度閉じた目を開けることはない。

「目ぐらい開けなさい」

今度こそ強い口調ではつきりといわれたが、ボクは今どんなことにも興味がないのでスルー。

パタパタ、そんな音が聞こえる。この音には聞き覚えがあった。なぜならキンジ曰く…

『アリアの地団駄は、けっこうおもしろい音が出るんだよ。パタパタ、と』

「アリア？」

「やっと気づいたの？」

キンジの言葉を思い出したので、目を開けてみれば…緋色の髪の毛のツインテールと角のようなものが見えた。

飛行機するときなどで何度か見たこと合ったし、期間的にはあまり離れていなかったので簡単に思い出すことが出来た。

しかし、一つだけわけのわからないことがある。

「ボクに何かよう？」

患者の来ないボクの個室に怪我もしていないアリアがくるのは少しだけおかしい。いや、実際には異常なんだけど…

それだけど前にも言ったとおり、アリアにはまったく持って興味がわかないのでもう一度目をつぶった。

どうせくだらないことだろう。そんなことを考えていたが、その考えが甘いことを知った。

「子供の出来方を教えなさい」

命令口調でそう言ってきたのだ。しかも、無い胸を…ズギュンッ！

右ほほをかすめたのは、一発の銃弾。撃ったのはもちろんアリアで、漆黒のガバメントの銃口から煙が出ている。

「またへんなことを考えていたら……風穴あけるわよ！」

どうしてわかったのかは、おいておくとして……名言が出た。もうすでに、この学校全体に広がっているアリアの名言。

ただ、確実にボクは驚いていた。と言うか冷や汗がだらだらだ。もう、気持ちの悪いほどに…

だが、そんなことをされても興味がないのには変わらない。

「それだけ？ それだけなら帰って。そして、産婦人科の人にも聞いてよ」

そこでならきちんと教えてくれるはず、と付け加えてまたまた目をつぶる。

「産婦人科？ ここにはなかったわよね」

いまさらだが、気づいた。そう、武偵病院には文字通り武偵の病院だ。武偵は確かにお金さえ払ってもらえれば、何でもする仕事だけど……武偵病院は少しだけ違うのだ。武偵病院は主に武偵から依頼してもらうことが多いために、産婦人科、小児科等の学生などに関係がなさそうなものは廃れてしまって、今はもうない。

「それに、私はあなたに依頼しているの。それを断るつもり？」

強引に顔を近づけさせてくるアリア。くちなしの香りがしたが、どうでも良いことには変わらなかった。

「それだけ？　だったら断るよ。ボクよりも詳しい人はいると思うし」

「Sランクのくせに？」

どうやらあつちはボクの素性などを調べ上げたのち、確認済みのようだ。

「Sランクしか信用しないのかい？」

狙撃科スナイプのレキも何回かアリアのミッションに同行したって話だし……

「二重人格」

「ん？」

突然言い出したその言葉にボクはおどろいた。

「二重人格に詳しいわよね。教えなさい」

最終的なアリアの考えはわからなかったが、しかたがないと割り切る。「心理学の先生にでも聞いてください。ボクは外科医です」と本当に言いたかった。が、一応一通りのことは知っているので説明することにしようと思う。

キンジの話によると、急に押しかけてきては、かつてに住み着いたとのこと。ここに住み着かれても、正直困りまくるので、丁寧に

説明をした。

アリアは真剣な表情でそれを聴いていた。

その様子は普段の性格から考えてみれば、まさに青天の霹靂^{へきれき}。目から鱗であった。

そして、最後の難関である。二重人格のせいで完璧に頭の中から消えていた言葉が合った。二重人格を教えたしまったので、もう後戻りは出来ない。

「で？ 二重人格はわかったから…子供の出来方を教えなさいよ」

相変わらず、無茶な質問である。高校二年生になっても、そういうことがわからないとは……呆れるを超越して脱帽ものである。

「コウノトリが運んできてくれるんだよ」

そう説明してあげた。次の瞬間にはのどに小太刀の刃が当てられていた。

彼女なりの、馬鹿にするな、のようである。つくづくボクは今、不幸だ。

この後、ボクはみっちりとアリアに対して保健体育の授業を行った。

余談だけど、最終的にアリアは耳まで真っ赤に染めて帰っていたのはここだけの話。そして、ボクの精神力はがりがり削られていた。

第7話 コウノトリが運んでくれるんだよ。(後書き)

アリアのキャラは難しいですね♪

難しすぎて、かなり時間をかけました。それでも、どこかおかしいような・・・

第8話 変態は本当に疑惑か？（前書き）

やっところさ、主人公の変なところをかけたぜ！ むずかしい・・・

第8話 変態は本当に疑惑か？

第8話

カムイの日記　昨日はアリアとかいうやつに、保健の授業をしました。結果、案の定どこかでアリアが顔を真っ赤にしながらボクの診察室から出て行くのを見られていたようで……ボクの変態疑惑に拍車がかかりました。

終わり

登校してみればこの始末でした。興味がわかないやつらばかりなので、どうでも良いが。誰一人としてボクに近づかないのは少し寂しい感じがする。

寝よ

机の上で腕を枕代わりに頭を伏せる。アンビュラスの非常勤講師である小夜鳴　徹が教室のHRをしに来たが、思いつき無視して寝た。

正直な話、ボクはこの先生を信頼していない。理由は………臭い。血のにおいが強いのだ。それも人一倍ではなく、三、四倍ほど。たぶん、血液操作能力の恩恵のせいなのだろうが、それがわかってしまった。それ以降、僕はあの先生を信頼しようとはしなかった。

「もう、そろそろアドシアードの時期ですが……関係ないですね」

なんか小夜鳴が無駄なことを言っていたが、その無駄なこと一つ大事なことを思い出した。

スナイプのレキが出るじゃん！

あのレキがでるのだ。興味が無いわけがない。一度対峙したときに感じたけど、あいつは強かった。ボクに負けたとはいえ、彼女の苦手な近距離戦あの強さなのだ。条件さえ揃ってしまえば、たぶ

ん僕の勝ち目はないだろう。

そのレキが出るのだ。なかなかおもしろいことになりそうなので、今のうちに特等席を取っておこうと考えるのであった。

そして、放課後。診察室にて、スベアの白衣の中からずっと放置状態の携帯を発見した。飛行機ジャックの後ぐらいから一切触れていなかったなので、もちのろんで充電切れ、なので一応充電器を差し込んでみた。

ピッ 取説を片手に電源をいれると、小さく電子音があった。もうすでに機械が苦手なボクにとって感無量である。

「おおっ」

ちょっとした感動を押さえつけて、メールを見ることにした。

「えーと……これか？」

取説をみながら半信半疑でボタンをおしてみる。またもや、ピッと電子音がなってメールボックスが開いた。

機械や取説相手に半信半疑になるのはボクぐらいではないでしょうか？

ちよつとした疑問だけど……とても気になるのだけれど……今は、メールのほうに興味があった。だから早速目を通す。大半はいつもどおり居候からの他愛のないメール。

最近はずっとくきていない。正確に言うとあの日——居候に名前を忘れたと言ってからきていなかった。別に心配することでもないので普通にスルー。

ただ、そんな寂しいメールボックスの中で唯一目を引くものがあった。

『ディランダル
魔剣』

あのときの魔法使いかな？

いつごろかに対戦したことがある、銀髪の美少女を思い出していた。そいつのことはあの戦いの後に居候に調べてもらった。

本当の名前は確か………ジャンヌ・ダルク。何世かは忘れた。

無論、あのジャンヌ・ダルクだ。フランスの国民的英雄にしてカトリック教会における聖人のジャンヌ・ダルクだ。

彼女も第？種超能力者^{ステルス}だったはず。この辺はいまいち良くわからない。が、実在しているのは確かだ。現にボクはこの目で見たし戦った。それに……

「あれの血は一度見たからね」

一度見た興味のあるものは忘れない、僕の特異体質（？）のおかげで一通りの場所は特定できたりするので、心配することなんてあるはずがない。

携帯を閉じてその場に放置。そしてボクは何か面白いことがないかな、と学校内を闊歩するのであった。

放課後より校内と一人で闊歩した結果……ついたのは女子寮。もちレキの部屋の前。そしてボクの隣にはレキがいる。

どこでナンパしてきたのかって？ いえいえ、そんなことはしていません。滅相もない。ボクは変態と呼ばれていますが、今のボクは紳士と言う名の変態です。紳士がそんなことをするはずがないじゃないませんか。

えっ？ 何をするつもりだって？ 何もしませんよ。

えっ？ 何を考えているんですかって？ 何も考えていませんよ。

えっ？ 好きなキャラクターを教えろって？ 憂鬱で言えば長門有希ですが、なにか？

えっ？ 危険じゃないかって？ いえいえ、滅相もない。ボクはレキの体に興味ありませんよ。レキに興味があるだけですよ。

えっ？ もっと危ないじゃないかって？ いえいえ、もう一度言いますけどボクは紳士と言う名の変態ですよ。

どうしてだろうか？ いつの間にかボク自身が「変態」を認めてしまっていた。早くも後悔……

さて、本題に入ろう。なぜ、ボクがレキの隣にたって、レキの部屋の前にいるのかを。放課後の校内を闊歩中のことだった。なんとなく、いや超直感……ただの勘です。とにかくボクの勘がおもしろいことを告げていたので、屋上に。すると案の定エリアとレキがいて

……

『レキ、白雪の見張りをしてくれない？』

『わかりました』

こんな会話が あった。その後、何とか気配を消してアリアを出し抜き、レキと……

『これから、依頼？　ボクも一緒にいて良いかな？』

一応、レキはボクの命を狙っている人だけど先日話の通りなら良いだろうと思い、そう言ってみたところ……

『別にかまいません』

ロボットの異名がこのとき初めて実感した。それほど、感情のもっていない声だった。

そして、現在に至る。今、レキは窓から見張りをしている。……

そのはずなんだけど……さつきから、動いていない。ボクので確認しているから死んではいないんだけど、胸の上下がないような……

えっ？　どこを見ているんだって？　やだな　ボクは医者ですよ。

下心なんてありません。

本当に見た感じでは生きている感じがよくわからない。精密機械であるロボットにたとえた人は正しいのだろう。

……

どれほどの時間がたったのだろうかわからないほど、ずっと見ていた。ちなみにレキは一回も動いていない。さらに能力で詳しく見ていたのだが……筋肉繊維の一つすら動かなかった。これはこれに関心ものだ。

でも、さすがに夜遅くまでこの部屋にいるのは良くないと思った。

「レキ、ありがとう。勉強になったよ」

だから、その一言を残して部屋を立ち去ろうとした。そのとき…

「こちらこそ、ありがとうございます」

「……ん？」

意味がわからなかった。過去形だったこともさらに意味が不明だ。

「あの時、あなたは私を助けてました」

あの時……もしかして…

「屋上で戦ったときか？」

「はい」

「何で？」

「私はあなたに負けました。なのにあなたは私を助けてました」

「うん、だから？」

「一応命の恩人ですので」

ずいぶんとたいそうな言葉が出てきたな

「恩人なんてもつたいない。それに…ボクは君に興味があったから助けただけだ。ただの自己満足だよ」

「たとえそうだったとしても、あれは致命傷でした」

ふうん、その程度はわかるんだ。

さらに、レキに対しての興味がわいてきた。おもしろい、久しぶりにそう思った。

「ですが、まだ諦めていませんので…気をつけてください」

良い殺気だ。ビンビン、と感じる、ぴりぴり、とした空気を感じ。思わずメスに手を伸ばしていたぐらいだ。いくら条件反射といっても、殺気だけで刃物に手を伸ばすことはめったにないので、驚いた。

「じゃあ、一つだけ忠告しておこう。……覚悟だけはしてきてくれ」

そこからは無言だ。ボクとレキは数秒間だけ見つめ合い、ボクのほうから視線をそらして部屋から出た。目の前に女子生徒がいたのは……どうしてだろうか？

第8話 変態は本当に疑惑か？（後書き）

これで、タイトルどおりのものをかけたと思います。

個人的には満足です。次回は一気に話しが飛ぶかもしれませんが、
いません。

誤字脱字訂正などありましたら、よろしく願います。

第9話 変態疑惑の加速と事件発生と（前書き）

今日は、なぜか学校が休み。

と言うわけで、2話ぐらい投稿します。

第9話 変態疑惑の加速と事件発生と

第9話

レキとの会話から数日後、ボクは個室のベランダでうなだれていた。理由はもちろん、レキの部屋から出たところを思いっきり見られたことだ。そのせいでボクの評価？ 信頼？ その他もろもろがこれまた思いっきりに下がった。

女子にはボクと目が合ったただけですぐに逃げて行く始末。

男子には、レキ、アリア、と人気の高い女子ばかり手を出しやがって、見たいな勘違いを受けて銃弾の嵐。

不幸中の幸いだったのが、個室の中にいれば誰も襲ってこなかった。今のところ一度も出ていない。

「けどね…」

食料がなくなった。ある程度日持ちがするものを買って……買いだめして籠城戦に挑んだ結果、すぐになくなった。援軍なんて来るわけないので、少しぐらい覚悟をしてこの部屋を出て行かないといけないと思うと憂鬱な気分になる。

いつまでもそんな状態でいるのもめんどくさいので、覚悟を決めないで部屋の外へ…

「このリア充が…！」

「のこのこと…！」

二人ぐらい、いました。たぶんファンクラブの人たちです。だけど、ただの武偵ごときでけんかを吹っかけてくるなんて…愚の骨頂

だよ。

周りを見渡しても誰もいなかったの、この二人には気絶してもらうことにした。懷から素早くメスを取り出して、刃がないほうで一閃。駆け抜けざまに放った一撃。それは見事にあごに当たって脳を揺らした。

ドサッ、と倒れる二人を尻目にメスを懷にしまつて歩き出した。
つまらないな、この程度か…

その後部屋に到着。時間は夜。午前中に出てきたはずなのに夜なのだ。

予想以上にファンクラブが物凄い抵抗を見せて、こんな時間帯に果てしなく遠い道になりなつてしまった。ちなみに、だれ一人とも戦っていない。一応ボクはアンビュラスなので「強い」と言うことは隠している。

あー、あの二人は例外ね。周りに誰もいなかったし、探偵科とい^{インケスタ}ことがわかつたので気絶してもらつただけだ。

その後のエンカウントはほとんどが強襲科^{アサルト}だったので、メスを使つたとしても数人に見られる可能性が会つたために全力で逃げた。気配を消せなかつたら今頃、至近距離で銃をぶっぱなされているだろう。

久しぶりの帰宅なので、リビングに合つたソファアに飛び乗り「あー」とため息交じりに息を吐き、襲われないことを祈りながら静かに目を閉じた。

あつ、そういえば……花火大会があつたような……どうでもいいか

翌日、個室にて待機中。アドシアード期間中のためアンビュラスはけが人の治療も行ふことになつていた。どうせ、誰も来ないので無視していたのだけれど…

『単位を下げるぞ』

先生からの恐怖のメールが届いたため、個室に待機中。レキのスナイプの競技も見れないので、軽く鬱憤がたまっている。

居候は大丈夫か？

昨日部屋に帰ったときにも、物音や気配を感じなかったので少しだけ心配だ。何だかんだ言ってもボク——本家の血を四分の一も受け継いでいるので気配の消し方も一流だったような気がする。

そんなことを言っても、常時消しているので気にならないんだけどな

時計を見て、待機する時間を確認し目覚ましを設定して、寝る。

チャララン♪

「チッ」

この音は目覚ましではない。ボクの携帯の着信音だ。それも運悪く目をつぶった瞬間になった。

多少イラつきつつも、取説片手にメールを見る。

『ケースD7』

件名がそれだった。

ケースDの意味は——アドシールド期間中の事件発生

D7の意味——事件であるかはわからないが、あまり騒ぎ立てずに極秘裏に解決せよ。

簡単に説明すればこんなところ。そして、事件の内容は『星伽の失踪』

星伽 白雪、現在キンジとアリアがボディガード中だったはず。理由は『魔剣』デュランダルに狙われているとかだった。

「はあ、Sランクがついていてこの程度か」

アリアの評価が思いつきり下がった。

実際に星伽さんには興味があつたけど、キンジに夢中だつてせいでこのごろ忘れていたんだよな、人間観察。いなくなつたならどうでも良いや。そう、軽く考えていた。

第10話 失踪二人目（前書き）

どうも、本日二つ目の投稿となりました。

かかった時間は何と一時間半。2617文字なのでかかりすぎ・・・
なのかな？ 執筆をしている方、できれば教えてください。

ではでは第10話、どうぞ

第10話 失踪二人目

第10話

どうして私はこんなところにいるの？ 『デユランダ魔剣』にそそのかされてついてきてみれば…いつの間にかこうなっていた。

気づいたら私はここにいた。なぜ？ どうして？ 太い鉄柱に太い鎖で繋がれている。さらに錠前は『ドラム錠』と呼ばれているものだ。

これはたぶん、私の対策なんだと思う。だって、電子機器だったら簡単に開けてしまうから。

「助けなんて…こない」

・・・は私のことなんてどうでも良いはずだから、どうせ助けになんてこないの。

星伽さんが失踪したとのメールが入った約数時間後。やっと待機時間が終了したので、部屋に帰る。そこに居候の物音や気配はない。ドアの取っ手に手をかけてみるが、いつもどおり鍵が閉められている。声をかけようと思ったけど、悪化するだけだな、と思ってやめる。

このままが一番良いのかもしれないな

この状態〃居候がこの部屋から出てこない、だ。これなら、あいつは誰にも狙われないだろう。今まで表舞台になんて立たなかったし、裏側の注目もボクの方に向けている。もし家族構成などが調べられても、大丈夫なように細工済み。居候の存在は完璧に消した。あいつことを知っているのは、情報提供者——警察の高官や各国の重鎮、公安0課、武装検事だけだ。

着ていた白衣をハンガーにかけて、ソファーに寝転がる。

レキの競技は今頃やっているはずだけど、最初から見れないんじゃない意味がないし……何をしよう

待機中だったときのストレスがいつの間にか体力を奪っていたように、すでに何もしたくないような状態となっている。指一本さえ動かすこともめんどくさい。だが……

グー

このようにボクのお腹は正直だった。お腹がなったのだ。買い物をするにしてもここから動かないといけないし、今のボクにそんなめんどくさいことをするような体力はなかった。

ソファーから立ち上がって、冷蔵庫の前に立つ。冷蔵庫の冷気が開けたときに襲ってきたが、暑くなっている時期なので丁度気持ち良かった。が、冷蔵庫の中を見て絶句。

「何もない、か」

いや、前言撤回だ。絶句ではないが、正直驚いた。居候の好物であるフルーツぐらいしかなかったのだ。普段なら保存食やレトルトが置いてあるのだが、運悪く全て尽きていた。以前、勝手にフルーツを食べたところ思いつきり怒られたので、フルーツに伸ばした手を一度止めたが、結局背に腹は変えられないとりんごをその手に持てる。

さて、りんごを手に入れたところでソファーへと移動し、ドスン、と何も考えずに座り、かじりつこうとする。しかし、また止まった。

口に運ぼうとしたりんごを目の高さまで上げて…

「久しぶりに皮をむいて食べてみようかな」

そう呟く。ちなみにボクは自身が持つ性格のせいで料理が出来ない。包丁なんてものを持った日には台所がたぶんミンチになってしまっただろう。

包丁はなかなかすごいよ。ナイフを持ったときには及ばないけど、確実にメスのときよりやばいからね

初めて包丁を持ったときなんて、父親と殺し合いをしてしまうほど暴走してしまった過去がある。若気の至りと言うやつだ。当時は力の制御の仕方を知らなかったので暴走してしまったが、今は持つとどうなるか、わからない。今から試しても良かったけど……止めしておく。よって、今回使う刃物は…果物ナイフ。

もちろん、常に装備しているわけがないので台所に行き、探す。

「果物ナイフ」

空腹でお腹が痛いがいつの間にか口ずさんでいた。

思っていたよりも簡単に見つけられたので、それを手に持った。

「ツツツ！」

持った瞬間に、澄み切ってゆく感覚。そのときに気が付いてしまった。

ドカドカとした足取りで居候の部屋の前に立ち、果物ナイフを鍵のある部分に突き刺す。

ガキッ！ 金属同士が激突する音が聞こえる。突き刺したナイフをそのままねじる。鍵は開いた。後は扉を開くだけだ。最悪なパターンしか思い浮かばないが、躊躇している場合ではない。覚悟を決

めて扉を開くと……

「くそっ！」

思ったとおり誰もいなかった。あるのはパソコンとディスプレイ、そしてベッドぐらい。思いつきりシンプルな部屋の中には誰もいなかった。ついでに言うところと隠れる場所もないし、今の状態では見逃すはずがない。

しまった、いつもいつもあの調子だったから……いや違う。俺がもつと……くそっ

反省会を反射的に中止し、頭の中を探る。

どこだ。どこに行った。あいつとの会話に何かあるはずだ。記憶の中を探してみても、あいつが行きそうなところの情報はない。そもそもこの学校に来てからあいつは、この部屋を出ていないのだ。行くあてなどどこにもない。

ああっ、もう

自分の失態を悔しく思いながらも、部屋を飛び出した。確かに行くあてなど存在しなかったが、心当たりはあった。

『デューランダル
魔剣』だ。

何が不屈の剣だ。こそそと水面下で動きやがって、調子に乗るなよ

能力を発動させる、と同時に携帯でレキに電話した。あいつなら知っているはずだ、と直感がそう告げたのだ。

はあ？ いつの間に電話番号を交換したんだって？ 部屋に行つたときにだよ

はあ？ どうしてかって？ そりゃ、興味があったし、スナイプのSランクぐらい協力体制を作っておきたかったただけだ

はあ？ 自分の命を狙っているやつを仲間にしてどうするって？
何言ってるんだよ。そう言っやつらほど信頼できるやつはいない

電話をかけて、数秒後。すぐに目的の人物につながった。

『どついう用件ですか』

「今起こっている事件について、だ」

『デュランダルですか』

「ああ、知っていることがあつたら教えてくれ」

能力を発動しているので、すでにデュランダルの居場所は特定できているが、一つだけ聞いておきたかったことがあるのだ。

『キンジさんがすでに向かっています。それにアリアさんも…』

ドンピシャで欲しかった情報が手に入った。
さすがはレキ、話がわかるやつでよかった

「ありがとさん、それで十分だ」

そして一方的に電話を切る。走りながら電話をしていたのでポケットに入れにくい。面倒だったので、握りつぶしてSIMカードだけを手にし、残骸を捨てた。SIMカードは武偵高校の制服の内ポケット——改造したので防水使用に入れて地下倉庫^{ジャンクシヨン}へと向かう。

はあ？ ご都合主義だった？ 違うぞそれは、防水にしておかないと俺の血が汚すんだよ。この制服だっていたい何着目だと思っ

ているんだ

誰に対しての愚痴だったのかは良くわからないが、走り出していた足はもう止まることなんてなかった。

第10話 失踪二人目（後書き）

誤字脱字訂正がありましたらよろしくお願いします。

第11話 気持ちとは…（前書き）

あれ？ 書いていて、物凄く恥ずかしくなったぞ？ でも後悔はしていない。

第11話 気持ちとは…

第11話

果物ナイフを手にとって、ジャンクション地価倉庫に走り出していた俺は、一つ重大なことに気が付いた。

メスとグロックを忘れた……

普段から常時着用状態の白衣なので完璧に忘れていたが、メスは白衣の内側に大量に装備されている。そそで、愛銃のグロックも……ブラックナイフは一応制服のズボンのところについているので問題無し。だが、果物ナイフとブラックナイフでは少しだけ加減がきかないのかもしれないので自重しよう、そう思う。いつもならメスで力加減をするのだけれど、今回はしかたがない。

殺さないようにしないと……

何かのひずみで武偵をやめるのもどうかと思うので、本気で加減しなければいけない。

「つたく、世話をかけさせやがって……」

ヒュッ、とナイフを振るい、ジャンクションの扉を両断。それと同時に蹴りを入れて中に入る。禁止区域に続いているエレベーターはすでに通電していない様子がすぐにわかったが、俺はあえてそれにのり、ワイヤーを切った。

少しの間だけの無常力を体感した後、地面が見えたあたりでナイフを壁に突き刺す。

ガリガリッ、コンクリートをナイフがえぐる音が聞こえて落ちていくスピードが徐々に落ち始める。無論、止まることはないが浸水してきた海水のおかげで衝撃を和らげることが出来た。

海水がなかったらどうなっていたのやら

あせりすぎてときどきしている心臓を、死ぬかもしれないと言っ
た事実を受け入れて……

「俺って馬鹿だな」そう思っただけだ。

ちなみに、ここは地下七階。高さにして十数メートル。確実に死
んでいたような高さだった。肩まで来ていた海水がこれほどまでに
うれしく感じたことはなかっただろう。

「ふざけんな！」

キンジの声がはつきりと聞こえた。どうやらあっちも大変なよう
なので肩まで来ている海水の中にもぐり、泳ぐ。ここまで水がきて
いれば歩くよりも泳ぐほうが速いと思ったからだ。

あいつは大丈夫か？

居候の血は……見たことも触れたこともない。それは出血をする
ような怪我をしたことがない、とうれしいようなうれしくないよう
な事実だが……今は血を見なかったことを後悔していた。少しでも血
を見ていれば俺の能力でどこにいるのかや、どういう状態なのか
把握できただろうが、ないものをねだってもしかたがないので全力
で泳ぎ、大倉庫にたどり着いた。

そこでは……キスをしていた。

こんなところで何をしているんだ

そうツツコミそうになったが、息継ぎをするためのようだったの
でお咎めなしということにしておいた。そんなどうでも良いこと
を見ている暇はなかったことに今頃気付いたので、すぐに水の中を見
渡す。

——いた。

目的の人物——居候を発見した。どうやらキンジは白雪さんを助
けることに精一杯なのだろう、気付いていないどころか……

死んでいるな……

俺は医者なので、とかそう言うの関係なしに素人でもわかる死人だった。まあ、まだまだ蘇生できる範囲だったので少しだけ安心しているのも事実。だけど物凄く取り乱しているのも、また事実。すぐに鎖を柱ごと切り落として動かなくなった体を抱きかかえる。

「くくく……あー、殺してやろうか」

キンジにも相当頭にきているし、『デュランダル魔剣』には完全にブチ切れた。近くにいたキンジが俺のセリフに驚いたのか、こちらを向いたがそれを無視して居候を水の中から引きずりあげた。

唇はすでに青くなっているし、生気も感じない。それも当たり前だろう、死んでいるのだから……

じゃあ、どうするのか。答えは唯一つ。彼女の唇の内側にナイフで傷をつけて、流れ出た血を吸うだけだった。それだけで、すべての血液を支配下に置く。

「ふがないな、ボクってやつは」

軽く自分で自分をせめて、ナイフをポケットの中に突っ込み。そして気道を確保したところで、人工呼吸をする。心臓マッサージはすでに能力が行使中のために必要ない。後は目を覚ますのを待つだけだ。

待つといっても浸水しているので時間もあまりない。

目を覚ませよ、早く！ 早く！！

あせる気持ちを抑えて冷静に人工呼吸をしようとしても、うまく気持ちを抑えきれない。

血は循環しているはずだ。なら、どうして……蘇生は出来るはずなんだ

考えている時間はなかった。天井と水面の間がもう少ししかない。

余裕があつた心にも、すでにあせりと悔しさでいっぱいだった。

「起きろっ！ 起きろって言ってるんだよ！」

失わないと決めたはずなのに…もう、二度と見たくはないと思つていたのに……

「起きろよ……幸愛」

自然に出てしまった本当の名前、忘れたはずなのに自然に出てしまった。時間的に最後だと思われる人工呼吸。必死になって行った。全力を尽くしたはずだ、悔いはないといったら嘘になるが。

何のために…

強引に彼女の口の中に空気を送り込む。

ボクは両親を殺したんだ

自身に限界が訪れるまで空気を送る。

守るため？ 誰を？ どうして？

「くそっ」

時間がない。

短すぎる。

生き返るはずなんだ。

時間はそんなにたつていなかった。

いろいろな要素を考えてみても、死ぬはずがない。

ボクは医者なんだ。ボクがいる世界が嫌いで、それに誰も巻き込みたくなくて、教えてもらったのに…

役に立たないのか？

今までの努力は無駄だったのか？

違うだろ？

気持ちが医療に関係ない？ それは違う

幸愛の唇の裏側の血が出ているところに手を当てる。自信はなかった。確証もない。だが気持ちはある。

「戻って来い！」

今まで医者をしてきて……初めての死人が守ろうと思っていた人なんて……ごめんだ。そんな人生はいやだ。

彼女を良く見ることが出来なかった自分が……気が付くことができなかった自分が……嫌いだ。

ナイフを手で握り、集中する。これだけでもいつもよりかは能力の質が違う。

丁寧じゃなくても良い、力強く、強引に……

「動けっ！！」

最大限に気持ちを込めて、自分の限界を超えよう。今はただ、彼女のために……

第11話 気持ちとは…（後書き）

注：この作品はハーレムを目指したものです。誰に何と言われようが、ハーレムを目指しています。なのでメインヒロインは幸愛ではありません。

ちなみに、読み方は、y u k i n oです。ゆきのです。

この名前の意味はそのまんまです。名前の由来は後日、語ってもらいましょう。本人に……仮の名前もそのときに……

誤字脱字に訂正よろしく願います。

残り一話で2巻は終了とさせていただきます。

3巻からの投稿は未定ですのであしからず。

第12話 四分の一（前書き）

これで終わりだ。二巻！！

第12話 四分の一

第12話

（動いた）

全力の能力の発動だった。今までの限界を軽く超えたような気がする。

居候……いや、幸愛と言うことにしよう。現に彼女の心臓が動いていることが、そのことを示している。

能力で確認しても心臓は動いている。

呼吸は……水の中なのでしていないが………いや、わからないな、どうだろう、呼吸をしているのか？ していないのかどうかはわからない。していても……どうなのかな？ 水中で呼吸なんて……うん、心臓は動いているから大丈夫か……

すでに天井と水面の間にはわずかな隙間しかなく、息を吸うのも困難だったが、これが最後なので思いっきり吸い込んで、幸愛の口に空気を送る。

（これなら……行ける！）

幸愛の口を手で抑えて、口から漏れないようにした状態で全力で泳ぐ。脇に抱えた彼女は重かったが、生き残るためだ。しかたがない。

大倉庫を出ると狭い通路に出るのだが、もちろん水に埋まっている。しかし、そんなものは関係ない。

必殺、壁キック水中バージョン！！

ふざけているわけでもなく、いつもよりも真剣に……全力で……壁を蹴りまくって前へと進む。

普通に泳ぐよりも当社比…5倍です。

エレベーターの場所には俺が落ちるときに使った残骸が未だに残っていたので片手で細切れにして、さらに自分の手首を着る。

「さすがに壁キックで上に行くことができるのは……マ●オぐらいだよな」

さすがに浸水しているのは、まだこの階だけだったので安心してわき腹に抱えてた彼女を持ち上げる。

「しっかし、おもブツ!!」

「な、何を言うつもりなんですか!？」

鋭い怒気と共に発せられたこれは、あいつの声と完璧な裏拳。あまりの痛さに頬を押さえていると、急に暴れだした。

「は、離してっ! 何で…何で…」

「おっお前…ちよっ……危ないって」

右手にナイフ、左手に居候。暴れないように右手で抑えようとしたが、ナイフを持っていたので危なすぎる。

それにまだ右の手首からは血が出ている。これを見せるのもあんまりだと思ったので、右手を居候の死角に隠す。

「なんで、助けに来たんですか!? だれも…助けに来て欲しいなんて「黙れ」いって…」

「黙れよ」

それだけを言って、血を足の裏でスパイク状に固めて右手首の出血を止める。

「舌を嚙まないように」

最後に忠告を言って、水面から飛び出した。

タアンッ！ タアンッ！ タアンッ！ リズミカルに壁を蹴っていき上へと向かう。スパイクのおかげで何とか地上へと戻った。

うん、やっぱりマ・オはすごいな。足の裏にスパイクを作っていなかったら、絶対無理だった

心の中で赤い帽子をかぶったおっさんに向かって敬礼し、居候を地面におろした。

「最初に言うておくが…何が、助けに来て欲しいなんていっていない、だ」

「だって…本当…に」

怒気を放つ。それだけで居候の言葉は止まった。

「一人前になってから言いやがれ、俺が今の当主だ。手間をかけさせるなよ」

「で、でも…」

「幸愛、二度は言わない。俺が認めるまでお前は俺のものだ」

思い出した真名を言う。

「そ、それは……私の」

「だから？」

目じりに涙をためてこちらを見上げてくる、居候。
うれしいのか？ 悲しいのか？ わからん

「あ、あの……ご、ごめんなさい」

「ああ？」

意味がわからん。何を言っているんだ？ コイツは？
ギンツ！ ギギンツ！ 金属音が聞こえてくる。

「それは後で聞かせてもらっ。今は……」

音がした方向を向き、その次に彼女の目を見る。

「潰すぞ、デュランダルを……お前も手伝え」

一度は白雪の攻勢に見えた戦闘も、白雪が力を失い始めると攻勢は次第に劣勢になっていった。

「甘い——お前はまるで、氷砂糖のように甘い女だ。私の肉体を狙

わず、剣ばかりを狙うとはな。聖剣デュランダルを切ることなど――絶対、不可能だというのに」

白雪が自らの刀を鞘に納めている間に、言葉は告げられる。デュンダルは未だに健在だった。どこか余裕のある表情を見せ、聖剣を白雪に突きつける。

「俺を怒らせたな……デュランダル」

そこへ、唐突に現れたのはカムイだ。右手には黒いナイフが握られている。

そんなカムイにアリアが吼える。

「素人はすつこんでいなさい!!」

まだアリアは知らない。この場で知っているのはキンジぐらいのもんだろう。

「黙れ雑魚が。吼えるなよ、弱く見えるぞ」

アリアがカムイの言った言葉に反応し、飛び掛るような動作をしたがキンジにとめられた。そんなキンジに向かって、ご苦労様、と軽く手をあげて示し、デュランダルの目の前に立つ。

「まさかお前が出てくるとわな」

「俺のものに手を出しておいて、来ないとても?」

ニヤリとカムイが笑い、デュランダルもそれにこたえるように笑う。

「前の私と同じだとは思うなよ」

「わかっているさ、さっきから見ていたしな」

「変態か？」「お前こそ」両者はそう言い、各々の武器を構える。

「行くぞ」

「来い」

それだけで十分だった。両者が武器をぶつけ合い、殺しあうのに十分すぎる、着火薬だった。

強いな

デュランダルと剣を交えた後の感想だった。正直に言って本当に強くなっていた。あのときよりも確実に手ごわい。

この戦いに心が躍っていることを実感し、クツクツと笑う。

ああ、殺してしまいそうだ

躍りすぎてどうにかなりそうな気持ちを抑えて、ナイフを握りなおす。

「はあ、武偵はめんどくさい」

「急に何を！」

右薙ぎに振られた剣を避けて、ナイフを振るう。

「殺さないのもめんどくさい、といっているんだよ」

右上からの袈裟切りを大剣の根元で受け止め、剣をひねりそのまま攻撃へと転じるデュランドル。

どっちをデュランドルといえば良いのやら

「ま、楽しめたらそれで良いよな」

「ぬかせっ！」

突き出された剣を半身になってかわし、お返しとばかりに懐に入り込みながら逆袈裟切り。

大剣は性質上懐に入られると弱い、デュランドルはそれを剣の柄で止め、それを支点としながら突き出した剣を振り上げた。

「ははっ」

笑い声を上げながら身を低くしてかわし、足払いを仕掛ける。デュランドルはそれを飛んで交わし、落ちてくると同時に剣を振り下ろす。「はあっ」と短い気合が込められている剣を右方向へと受け流し、柄を剣で押さえて左拳で殴りかかった。

「くっ」

ようやく剣から話した左の掌で受け止めた。しかし、これでチエツク。剣は押さえられ、左手も俺の拳を握るので精一杯。足も踏ん

張ることに使っている。

デュランダルはそれを悟ったのか、両目を閉じ集中した。どうやらステルスを使うつもりらしいが…

「残念でした」

ズガアアアン！ 後にあつた壁が綺麗に両断され、そこから出てきた陰がデュランダルに接近した。

「チェックメイトです」

接近した陰はすぐにその手に持っていた果物ナイフを首に押し付ける。

「なっ、貴様は！？」

突然現れた襲撃者に驚愕の表情を見せるデュランダル。それを尻目に警戒の緩んだ剣を持っている手に、ナイフを突き刺す。

「ガッ」

ガランガラン、とあたりに金属音をだしながら、床に落ちる聖剣デュランダル。

「誰か銀の手錠を持ってない？」

居候のナイフがデュランダルの動きをとめているので、今のうちに手錠をかけたかったが…

「武帝は人を殺せない……何っ！？」

体に力を入れようとしたんだな、わかるよ。今の俺にはね

「これまた残念でした。俺のステルスは血液操作。君の血液にじかに触れている今、君の体は俺が掌握している」

正直な話、血液と言うのは細胞に染み渡っている組織液、と呼ばれているも含む。第一、人や動物の血液と言うのは、体液とほぼ同じ意味を持つ。また、人間の体は大体水分で出来ているため俺の能力はその水分を操るのだ。

よって、俺の能力は水を操る能力にほとんど等しいが、血液をもっとも上手に操ることが出来るので「血液操作能力」と言う。俺もその言葉自体を気に入っており、また先祖代々血液を操ってきたためこっちの名前を使うことにしている。

「ではっ…コイツはっ？」

忌々しそうに居候の顔をにらみつけるデュランドル。居候は多少びくついたがそれに動じず、ゆっくりとナイフをのど元から離れた。

「ナイフを返して」

そう言つと、黙って俺の手に果物ナイフを乗せる居候。ナイフを離れた瞬間にまどっていた空気、雰囲気ガラッと変わった。

「まさか」

「うん、たぶん、そのまさかだと思うよ。彼女は四分の一クォーターだから」

こういうことを、策士策に溺れる、と言っただっけ？

「カムイ、それは違います。この場合はただの情報不足です」

居候に勝手に考えてることを読まれて、訂正させられた。

「デュランダルは私のことをただの情報屋ということしか知らなかったようですから」

さらに追加の説明ありがとうございます。心の中で感謝の気持ちを言う。

そのときにアリアが銀の手錠をデュランダルの腕にかけた。

「逮捕よ!!」

最後に独特のアニメ声がその場を制した。

これで事件は一件落着となったが……

あれ？ 俺の手柄をアリアは自分のものにしていませんか？

第12話 四分の一（後書き）

うん、うまくまとまっていないうな・・・気もするけど・・・これでもいいですよ。

最後の締めは、外伝で書きたいと思います。いつごろになるかは未定です。

誤字脱字訂正などがありましたらよろしく願います。

第12話外伝 そろって帰宅

第12話外伝

「なあ、カムイ。クォーターて何のことだ？」

ジャンヌを警察の車まで見送った後、キンジがそんなことを聞いてきた。

確かに普通のクォーターの意味は、ハーフとハーフの子供のことを言うのだけれど…幸愛はそう言うふうに見えない。疑問に思うこともわかる。

「四分の一、俺と同じ血が四分の一と言うこと」

「それがどういうことになるんだ」

どういうことを説明すると……凶器を持つと俺と同じように覚醒（？）することだ。攻撃力が上がったり等の恩恵を受けること。と説明しても良いのだが……キンジにはまだ早い、か…

「企業秘密で良いか？」

「教えるよ」

「いくらお前だからといっても、これは無理だ」

キンジの目を見ていったため、キンジが一瞬だけひるんだ。
チャンス
好機！

「行くよ」

幸愛の肩を押して部屋に移動させる。

「ちょ、待てよ」

「ごめんね」

キンジが俺たちを止めようとするが、それを無視して寮の中までダッシュで移動。

アリアがジャンヌについていってよかったと今俺は思う。いくらボクでも…怪我させずに逃げ切れる自信はない。

あの執念と意地は子供らしいが、終われる立場になると厳しいものがある。

「あ、あのカムイ？ 少し待ってください」

寮の二階に上がったところで、幸愛がふらつく。

足にきているのだろうだけれど……さすがに速すぎる。

そう思ったが、良く考えてみれば珍しいことではなかった。

コイツ…今日始めて部屋から出たんだっ…

「はぁ、仕方ないな……乗れ」

壁に手を突いて息を荒くしている幸愛の前にしゃがむ。

「で、でも…」

「遠慮すんな、うざいぞ」

うざい、その言葉を聴いた瞬間に俺の方にゆっくりと触れ始める。
やっぱり……か

「早く乗れよ」

「はい」

やっぱりボクに何らかの感情があるな……なんだろうかこの感情は……

「もうしわけない、か」

「はい？ 何ですか」

おっと、考えていたことが口から出ていたようだ。

「いや、なんでもない」

淡々とそう言って、話を終了させる。

俺の命令を簡単に受け入れるのは良いが、もう少しでも良いから意思を持って欲しいな

背中にある人の体温、少しだけ軽く思える体重。これがこんなにもボクを安心させるものだとは思わなかった。

「私は……重いですか？」

ジャンクシヨンのときから引きずっているらしい……別にあの時だ
って思いと入っていないのだけねど……

「ジャンクシヨンのときも……重くなくてよかったよ、って言う

と思っていたんだけど……」

●リオの真似をしたときは、正直きつかった。あれ以上重かったらたぶん…落ちていただろう。

「それよか、お前はまだ太っても良いぞ」

これは医者としての意見だった。彼女の血を口に含んだときにすべての情報を手に入れることができたが…これはやせすぎだと思った。

女にしては少なすぎる体脂肪率なのだ。

「胸か…胸なのか」

「へんなこと考えていませんか？」

こいつの体脂肪率はすべてが胸なのではなからうか？
ボクの背中にあたっている二つの女独特の感触を意識しないわけではない。

B…いや、Cか？それぐらいはあるな…

「やっぱり、胸だろ」

「だから…何を考えているんですか？」

太ももにはほとんど脂肪がないしな、それに足細いし…

「やっぱり胸だな」

「だから 何の話ですか？」

「いやな、お前の体脂肪率のことなんだけど…」

「ふーん」

首にあたるこの冷たい物体は…果物ナイフだ。

いったいいつとったのかは良くわからないが…

まずい、まずい、はつきりいつてあの状態は訓練でもしないとうまく制御できない。

「危ないから、ナイフを離そうね」

「馬鹿にしていますか？」

幼稚園児を相手にするようにやさしく声をかけたのだけれど…逆効果でした、はい。

こういう場合は、強引にでも素早くナイフを掠め取る。

「ああっ！返してください」

「いつ暴走するかもわからないのに、簡単に貸せるかよ」

ボクも一度だけ暴走したことがあるので、良くあの危険性がわかる。

気付いたらあたり一面が、ばらばらになっていたからね

こんな狭いところで暴走して、寮が崩れても困るのでこいつにはナイフを持たせないようにしよう。

「あ、そういえば……お前の仮の名前はなんていうの？」

「本当に忘れたのですか？」

「うん」

「教えたくないですけど……決まりですからね。…静です」

「リョーカイ、静ね。よろしく」

ボクも覚悟を決めないとな…

「どうしたんですか？ 急に改まって…」

「ん？ 何を言っているの？」

お前のせいだろうが、こんなことになったのも…
しかし、静の顔にはまったくもって疑問しかない。

「本当にわからないのか」

最終確認として聞いてみた。

「はい」

少々自信なさげにそう答えた。

本当ですか……これはこれは…頭の悪い

「良く聞いてね。お前の顔はばれた、俺はそれを隠していたのにもかかわらず」

「すみません」

話の途中で謝られても困るので、軽く無視して話を続けた。

「お前の情報がどこまで漏れているのかは知らないけど、とにかく今までより危険になったことには変わらない」

「はい」

「ボクのそばにいる」

「はい？」

ここまでちゃんと話を聞いていた静が取り乱す。それも、ボクの背中から落ちそうになるぐらいに。

「あ…え？ ……あの」

「ボクのそばにいる、と言った。そうじゃないと、お前が危険だからね……………静？」

急に黙り込んだ、と言うか身動き一つしなくなったので後に顔だけ振り向いて表情を窺おうとした。

が、しかし、ビタンツ！ びんたによってそれは拒まれる。

「いてっ！ 何すんだよ」

「ごめんなさい……………けど、今はダメです」

何がさ、とでも言おうと思ったけど……………ここは素直に従っておこうと思う。

これ以上殴られても困るし、もう少しで部屋の前だ。これ以上騒がれていては男子寮のため問題になりかねない。

あゝあ、ホントめんどくさくなってきたな……まあ、おもしろいから良いけどね

ボタン、とドアは軽く音を立てて閉じた。

第13話 刃物フェチ？（前書き）

久しぶりの投稿。駄文です。

アニメに抜かされたので、あせって投稿しました・・・orz

第13話 刃物フェチ？

第13話

「これが…デュランダルか…ウフフ…」

カムイはあの事件のあと、証拠物であるデュランダルを情報と引き換えにもらっていた。

今までは出番がなかった重度の刃物フェチが発生しているのであった。

「これは良い剣だな」

「ジーーーー」

そんなカムイをジト目で見続けている女子生徒が一人…静である。

「カムイ…カムイ…」

何度も何度も呼び続けているのだが…カムイの剣を見る目はすでにこの世にはなかった。

静が実質手に入れたものにもかかわらず、自分の手柄みたいになっているのは静からしてみれば…複雑な気持ちであった。

「美しいし、切れ味は良いし…できれば色金殺女も欲しかったのにな」

トリップ状態となっているカムイを見て…ジト目ながらもため息をつく静であった。

目の前にデュランドルがある状態はボクが興奮するわけにじゃないかつ！

静からのため息が聞こえたが、それが気にならないほど興奮していた。

確かに、刃物には本当に興奮させられる。
それが…名剣であればあるほどだ。

うーん、これがあのデュランドルか……

「リミッター、ね」

「どうかしたんですか？」

おっと、口に出していたようだ。

そのことが気になったのか、静が話してきた。

「なんでもない」

淡々とこうつけて、もう一度思考に戻る。

本来の力を発揮していないな…この剣は……色金殺女のほうは…
星伽に連絡を入れても信じてもらえないよね…

名剣と名高いあの色金殺女。本当はこの手に持ってじっくりと鑑賞したいが……できないものは仕方がないので、今回ばかりは遠慮しておこうと思う。

「さてと、絶対に触るなよ…静」

「わかりました。危険だからですよね？」

「うん、わかっているならオツケー」

「けど、訓練はしないんですか？」

確かに静にもボクと同じ力がある。が、たとえ教えたところでどうにかなると思っていない。それに、そんなに甘い世界じゃない。

「攻撃の避け方、反応速度の上げ方なら教えるけど…：：：戦闘訓練は時間の無駄。それに…ボクが守る意味がないじゃん？」

ハハハ、と笑いながら冗談混じりに言っただはすなのだが…言われた本人は顔を赤くしてもじもじとしていた。

あれ？　もしかして…：：：まさかね、うん。そんなわけはないよ…それにボク変態だし…

これ以上ここにいっても変な空気になりそうだったので、カムイは屋上に移動した。

そのときに静に止められそうになったが、全て無視して屋上に来た。時間帯は昼だったし、学校は休み…：：：誰もいないはずなのに…そこには誰かがいた。

「はあ…い、お久しぶり。カ・ム・イ」

何かを誘うような声でボクの名前を呼ぶ。

綺麗な金髪、愛らしい顔、アップサイドテールの小柄な体格。忘れるはずはない、峰・理子・リュパン。

まるで待っていたかのような感じだった。それに、あの目はボクにどこか期待しているかのような目だった。

やっぱり、おもしろいな……本当は解剖したいんだけど……期待している理由も聞きたいし、また今度にしておこう

割と物騒なことを考えていた。

「そうだね。もしかして…ボクがここに来ることを待っていたのかな？ それに、君がそこにいるということは……司法取引、そうだろう？」

司法取引——簡単に言うと、罪を認めて捜査に協力するかわりに、罪を軽くする。と言うこと。

「両方とも正解っ。よくわかったね」

「ボクは馬鹿じゃないんだよ。理子ちゃん」

「キンジより、って言いたいなの？」

「ヒステリ・サヴァン・シンドローム H S S 状態のキンジよりかは悪いけどね」

「くふっ、やっぱり知ってたんだ。H S S」

かわいらしく笑いながらも、未だに自分の真意を隠している理子。尻尾も出さないなんて……しょうがないな

「それで、何のよう？」

「ん？ 急にどうしたのかな？」

こちらから聞いてみたのだが、それでも口を割る気はないらしい。交渉がうまくない、ボクを興味心身にさせてうまく使おうと言う魂胆なのかな？

「ふふつ、ボクは暇だからさ……何でも手伝ってあげても良いんだよ？ 理子」

この言葉の特に後半のほうは甘くささやくように言ってあげた、名前はさらに甘く。

「ばれちゃった？」

てへっ、と舌を出しながら笑い、そして頭を、ポンツ、と叩くようなしぐさを見せた後、急に雰囲気が変わる。

「ブラド……無限罪のブラド……そいつに取られた私の宝物を取り返すのに手伝って欲しい」

いつにもなく、真剣そのものの雰囲気を出していた理子はそう言った。

手伝っても良い、ボクは確かにそう言ったが……さすがに理由ぐらいは知っておきたい。

「ボクを誘った理由は？」

「もちろん、強いからに決まっている」

「ボクの物を盗みにきたのに？」

「……それは、許して欲しいな？」

別にあのときのことはどうでも良かったが、本当に困っているようだ。男口調だった理子もいまでは普通の口調に戻っていた。

「キンジとアリアもさ、もちろん誘うよね？」

「うん」

素直にうなづく理子。

どうやら、これ以上探しても何も出さないつもりらしい。

「よしっ、良いよ。手伝ってあげる」

「理由は？」

裏切らないか、疑っているようだ。

ボクのことを探るように見つめている、正直気に食わないし、嫌いだ。

だからボクは素早く身を翻し…

「興味があるから」

それだけを言い残して、屋上から出た。

あれ？　そういえばボク、何をしに屋上に来たんだっけ？

そんな疑問が浮かんだが、その後何もなかったので良かった。しかし……屋上には理子がいたし……待っていたような感じだったし……不思議だな、まったく

第14話 星伽がなんだあ！ … ナニソレ？

第14話

ボクは今、小講堂であの小夜鳴先生——正直先生と呼びたくないが——の遺伝子工学の講義を受けていた。

「え、遺伝子というのはですね……………」

本当にどうでも良い授業だったので、レキからもらったオススメのカロリーメイトをこっそりいただきながら講義を受けていた。ボクにとってはこんな講義ほど時間の無駄でしかなかったが、全員参加だそうで……逃げ切ることができなかったのである。

いくらなんでも……単位を後盾にされてしまうと……手の出しようがない……

ボクはこの先生が嫌いだ。理由は前にも言ったとおり『血』のにおいが強いからだ。

まるでむせ返るようなにおい、馬鹿な女は簡単にルックスにだまされて近づいていくが何をされたのやら……目撃情報では、間借りしている教室の中からふらふらしながら出て行った、そんな話を良く聞く。

そして、ボク以外の生徒はまだそのこと自体に気が付いていないらしく。普通に講義を受けている。

ばかばかしい、頭がだんだんと痛くなってきた。

そうか、これを理由にすれば良いんだ、一応講義にも参加したし、俺は一応Sランクだし、免除されるよね？

誰に質問しているのかはいざ知らず、自分の疑問に自分で答えて……行動に移した。

「先生、体調が悪くなったので自分の診察室で寝てきますね」

そう言っ、小夜鳴の戯言にも耳を傾けずに小講堂から出て行っ
た。

さて、めざすは自分の診察室。場所は……アンビュラス救護科の十階。応接室
の隣だ。

ちなみに、部屋の割り当てにも……ちょっとしたルールが存在す
る。

ランクの高い人から応接室の近くにある診察室に入るのだ。

まあ、腕の良いやつを近くに置いとくのは妥当な判断だと思うが
……いかんせん、俺の自由がないのだ。

休みを取るうにも訪れる患者——といっても男だけなのだが——
が多すぎて困る。

特に強襲科の面子は本当に多い……責任者よなぜ怪我をさせる、
ボクの仕事が多くなるじゃないか……

そうそう、女子がなぜボクの診察室を訪れないかと言うと……もち
ろん、ボクが変態だと言う誤解があるからだ。

その誤解を知った静が何度も何度もボクのために情報を操作した
が、結果はかわらず。

このことに本気で静が落ち込んでいた。かわいそうだったよ。

そんなことを考えている間に、自分の診察室（これからは診察室
と書きます）に到着したのでその中にあるベッドの上に寝転んだ。

「ふうー」

体中から息を吐き、体をリラックスさせて本気で眠ろうとしたと
きだった。

この部屋の隣からだろうか……

『いいんです！ もう巫女じゃなくなる覚悟もできていますっ！
星伽がなんだあ！』

なんだあ？ これはなんだあ？ 星伽ときてるから…生徒会長さんだと思っただけど……なにやってんだよ…相手はキンジだと思っから、特に心配はない…

『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』——遠山家の特異体質で能力上昇ができるかわりに、女性の言うことを何でも聞いてしまっう。

…まずくない？ これはまずいけど…まあ、別に良いか…キンジが誰とくつつこうが興味ないし……あ、そうだ。もしものときのために先生の報告する準備を…

カムイはいそいそと盗聴器の準備をし始める。

ちなみに、この盗聴器はカムイの仕事道具のひとつでもある。

本人曰く、意外とこれが役に立つんだよねww

何にどう使うのかは良くわからないが、そこは後々わかることだろう。

そんなこんなしている間にカムイは設置を完了させ、あとの出来事は本人たちに楽しんでいただくと言うことで、理子に電話をかける。

「もしもし」

『あー、カムイだー。もしかしてえ、ラブコール？』

電話から聞こえる口調からわかるけど、絶対に今、理子はもだえている。そう思わせるようなテンションだった。

それが嘘かどうかはカムイは知るよしもなかったが、機械音痴の自分が電話をかけたことに興奮していたので気が付かなかった。

「それで、あのことなんだけど……」

『うんうん』

「独自に行動させてもらうね、やるべきことも多いから」

数秒間だけ沈黙したあと、理子がゆっくりと真剣に話し始めた。

『どうしても?』

やるべきこと、このことについて聞いてこないのは彼女なりの配慮なんだろう。

「うん。それに大丈夫だって、ボクのマottoーは依頼された仕事は完璧にこなすことだから」

『……わかった。必ず、来てね』

あの理子がこれだけボクに執着するということは、『無限罪のブラド』は相当やばい相手のようだ。

「それじゃあ」

通信終了ボタンをおして、寮に向かう。
静に、ブラドの情報を調べてもらおう
そう考えながら足を進めるのであった。

第14話 星伽がなんだあ！ … ナニソレ？（後書き）

誤字脱字訂正などありましたら、よろしくお願いします。

第15話 殺しの仕事（前書き）

やっと、プロットどおりに進んだ気がする……
しかし、まだまだだと感じる今日この頃。

早く、上手に、綺麗な描写でかけようになりたいな

第15話 殺しの仕事

第15話

「はあ… ホントこの仕事は、なんというか… 疲れるよな…」

カムイは血の中に立っている。

それも、元々人だったと思われる肉塊も含めた血の中だ。

黒き刃を持つ『ブラックナイフ』と呼ばれる手に持ったナイフには未だに鮮やかな血が滴っていた。

カムイは今、たまりにたまった依頼をこなしていた。武偵高校では認められていない『殺し』の仕事だ。

ひさびさに勘を取り戻したかったこともあるし、殺すことに躊躇しないようにするためだった。

「こちら、カムイだ。終わったぞ」

『了解です。では、所定の位置まで移動してください。次の仕事はまだあります』

「はいはい、わかりやしたよ」

インカムでの通信を終えて、ナイフに滴っていた血をその辺にあった服でぬぐう。

死体処理のほうは、依頼者がやってくれるようだけど…

「ちっ、怪しすぎるんだよ」

返り血を一滴も浴びていない白衣の懷から盗聴器を取り出して、

手馴れた手つきで取り付ける。

依然、通常の状態で設置したときの数倍は早かった。

設置後は依頼者の言うとおりに領域を離脱し、指示通りの場所へと走る。

今回の依頼内容は…この屋敷にいるものを全員殺して欲しい。

そんな内容だった。しかも死体処理までしてくれると言う豪華特典つきなのだ。そして依頼金も、そりやもう大量の金額だったのだ。怪しくないわけがない。

確かに俺は殺しの依頼を受けたが…

「人を呪わば穴二つ。あまりこういうことはしたくねえが…静頼んだぞ」

「……はい」

こいつも何だかんだ言って、慣れてきているじゃないか

最初のころは殺したことを報告しただけで気絶までしていたのにもかわらず、今じゃ本当に強くなった。

こっちも仕事がいやういと言っもんだ。

「くだらねえ、仕事だ。さっさと済ませるか……」

ガシャァン！ 背後にあったガラスを割りながら、落ちていく体。場所は高層マンションの十二階の窓であった。

背中中に痛みが走ったが、外相はなかった。しかし、今はそんなことを気にしている暇はない。

すぐに空中で体勢を立て直し、ナイフをコンクリートの壁に突き刺してぶら下がる。

「ミスったか」

しくじった。対象が一人だったので素早くその首を落とそうと接近したところ、部屋のどこかに隠れていた誰かに吹き飛ばされた。ナイフを持っている状態のカムイがしくじることは普通ないが、長時間使用していることややる気がないせい、それに最後の依頼だったので功をあせってしまったからであろうか、集中力が切れかけていたところをやられてしまった。

久しぶりの仕事で無茶をしすぎたか？ あせりすぎだな……すぐに自重して思考を切り替え、いったん地上に降りた。

『大丈夫ですか？』

驚いた様子で聞いてくるが、それが逆に冷静にしてくれる。

俺は死ぬわけにはいかない

そうなのに、一発をもらってしまったのだ。何という失態だろうか、悔しかった。

悔しくて悔しくて、本当にぶちぎれてしまいたかった。

しかし、殺し屋は誰にもその現場を見られてはいけない。そんな暗黙の了解があるので目立った行動ができない。さっきの出来事は周囲の警戒心を高めただろう。

やりにくくなった。動きにくくなった。

状況は最悪。こういうときは……

「静、今すぐに詳細な情報を頼む」

無理をしないで静に頼ったほうが速い。

静のほうも、待ってました、と言わんばかりにすらすらと告げる

『十階に五人。十一階に三人。十二階に九人です。十二階にいるうちのカムイを吹き飛ばしたと思われる人物は……同業者です。気をつけてください』

ボディガードを雇っていたとは……聞いてないぞ

依頼者に愚痴を後で言ってやろうと思い、メスにワイヤーをくくりつけて投げる。

ちなみにこのワイヤー、以前ジャンヌが使っていたものと同じ『ツイストナノケブラーワイヤー』通称『YNKワイヤー』だ。

良く切れるが、ほんとに丈夫なので役に立つのだ。

くいつくいつ、とちよつと強めに引つ張り、きちんと壁に突き刺さっているかを確かめる。

十分強く刺さっていたので、血を足の裏にスパイク状に固めてワイヤーを引つ張りながら壁を駆け上がる。

「いたぞー!!」

上っていったところの窓の近くに丁度敵さんがいたらしく、叫ばれた。

無視しても良かったが、今は静を守るため、と言う名目もあるの
で……ただ返すわけには行かない。

「俺を見たやつが普通に生きていけると思っなよ」

窓を蹴り飛ばしながら室内に入り、銃口を向けている敵と目を合わせる。

多少の覚悟と、大量のおびえが見えた。

完璧なる素人だ。プロではない。これぐらいで取り乱すやつはこの世界では、生きてちゃいけない。

「生きていけない」のではなく、「生きちゃダメ」なのだ。

「覚悟は決まったか？」

まあ、たださすがにここで殺すのもかわいそうだったので……

「目と耳だけはもらっぞ」

そう確かに言ったが、本人に届いているか良くわからない。

もうすでに断ち切った耳が地面に落ち、目が合った部分からは血が出ている。

生きているだけでも、運がいい

耳と目を両手で押さえながら、もたえている敵を尻目に銃口を向けているさらなる敵に標的を変える。

その息が上がっている様子から、走ってきたのだろうが……体力がなさ過ぎる。

シュツ、と風を切る音になり、男の声と思われる断末魔があたりに響く。

カムの放ったメスが両の目に刺さったからだった。

断末魔が非常に耳障りだったので、素早く接近しカムイは止めを刺した。

「ちっ」

今の断末魔が、他の敵に聞こえているようだ。廊下を走る音が徐々にこちらに近づいてくる。

はあ、残念だ。残念すぎる。馬鹿は本当にこの世に大勢いるようだ…

「真っ直ぐな廊下を真っ直ぐにかよゝ、馬鹿が」

今さっき切った男のしたいから血がナイフに集まる。
そのナイフの切っ先をドアに向けた。

「奔れ、“一本血槍”」

そして、血は名前どおりの槍の形でドアを突き破り、走ってきていた敵を何人も貫くように噴出した。

銃と同じく、殺したときの感触が手に伝わらないことは嫌いだった。でこつという技は嫌いなのだが、今はすばやく殺すことが先決だった。この技を使った。

仕方がないこととはいえ、なんと気持ちが悪いくさだろう。切る感触がないことが本当に嫌いだった。

命を奪っている、と言う実感があつてこそその殺した。そう教えられていた俺にとっては耐え難いものだった。

奪っている実感がなければ、殺した人に対しても失礼になつてしまふ。だから……

「その辺についてはどう思うよ、同業者あ！」

いつの間にか接近されていたようだ。

背後から近づく気配だけを頼りに攻撃を回避し、振り向いた。

そこには、振り下ろした拳をゆっくりと戻している巨漢の男がそこにいた。

「私には意味がわからないな」

そしてまたゆっくりとした動きで拳を構える。

律儀に答えてくれる優しい殺し屋だった。

普通の同業者なら語ることもしてくれないことのほうが多い。

「さて、悲しいけど……やりあいますか」

相手は行かせてくれなさそうだし、ここで時間をかけると対象が逃げる可能性もある。

なら、答えは一つ。素早くこいつを殺すしかない。
といっても、殺し屋の戦いの基本は……

「一撃必殺。お前素人だろ？　それか、入りたてだと思っただけ」

「……………」

「まあ、関係ないか」

ナイフを持つ手を前に、足を軽く開いて半身になる。

これがカムイの構えだ。

両者の目が一瞬だけ交差し、カムイが先に飛び込んだ。

巨漢の男はそれを迎え撃とつと体を強張らせたが、それは間違い。
もう遅いのだ。何もかもが……

ずるずるとした音を立てて、巨漢の男の体がずれていく。

カムイの放った一撃が、右の肩口から左の腰までを切ったのだ。
要するにただの袈裟切り。

ただし、相手が切られていることに気が付かないほどの速さを持つ袈裟切り。

ほどなくして、赤い鮮血が噴出し先に落ちた上半身を追うように
下半身が地面に崩れ落ちる。

その後、対象を切り殺して依頼をクリアした。
依頼金と成功報酬の管理は静に任せてあるので問題ない。

『カムイ、さっきの盗聴器の件ですが……黒でした。今すぐにもど
つて始末してください』

「はあ……」

そりゃため息も出るさ、めんどくさい
本当にこの世界は腐っている。そう考えながら、少しだけ増えた
仕事を終わらせるために全力を使うのであった。

第15話 殺しの仕事（後書き）

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第16話 特訓WW（前書き）

明日で三巻を終わらせる！！

全力で突っ走るぜ

第16話 特訓ww

第16話

「あつはつは、それぞれ」

「ちよっ……まって……くだ……ひい」

あはは、今だとわかるよ。幼い日の父親からいじめられた理由が……これ楽しい

まずは通常状態での反射神経を高めるための修行。

何だかんだ言って、あの力に頼ることは危険すぎるので、まずは身体能力の強化から始めたこの特訓。

ボクがメスを投擲して、静がよける。

「け、け、怪我したらどうするんですかあ」

もうすでに泣きそうになってるが、自分の胸を軽く叩いて「治せばいいじゃん」と言うと、絶望感漂う表情を見せた。

ああ、なんておもしろいんだ。顔のニヤニヤが止まらないっ！！いつも以上に興奮しているボクとそれを泣きそうになりながらよける静。

はたから見れば、本当にカムイが変態と呼ばれる理由がわかる気がする。と言うか、これがさらに変態疑惑に拍車をかけることになるなんて、カムイは思ってもいなかった。

ちなみに、前回行った仕事の結果については……

・お金がガッポリ

・感覚を軽く取り戻すことができた。

・カムイをだました依頼者は、綺麗に斬殺されました。だました理由は多額の保険金目当て。人間のクズでした。

簡単にまとめるとこんな感じ。

かけられていた保険金は……ユニ・フに募金します、との遺言を書いてきたので悪いようにはならないはずだ。

なんて俺は優しいんだろ、そうそのときのカムイが思ったのは秘密のお話。

そして、今。

「はあ……はあ……」

地面に寝転がりながら肩で息をする静を見下していた。

「体力ないね」

「あたり……まえ……です」

一言言っただけでも死にそうだ。

「だけど、これね」

「……はい」

「レベル1」

あの某銀河のアイドルみたいに、キラツ、見たいなノリでそう言う。

すると、乾いた笑みを浮かべてそのまま力尽きた。と言うか寝た。ちなみにこの特訓、メスを投げるといっても……その、なんだ？

あまりに遅すぎるので説明のしようがない。

うーん、あれか？ ナメクジ以上、蚊未満ぐらいだ。あ、ちなみに蚊の方は冬越しのほうね。あれは本当に良く動くやつだから……めんどくさくて、ついついボクはやっちゃうんだよね、家ごとバラバラに……

バラバラにと言うふうについているが、本当はオールレンジをいっせいに切り刻んでいるから、狭い屋内ですると……衝撃波が発生し……家が崩壊するのだ。

何度怒られたことが、何度吹き飛ばされたことが、何度ボロ雑巾みたいになるまでしごかれたことが……いや、暴走というのは怖いね。

「こいつに、教えるのはあまり賛成できないけど……誓ったことだからなあ」

「なんだこんなところにいたのか」

んにゃ？ 誰だ？

声の主を見るために振り返ると、ジャンヌがそこにいた。

「なんだ、あなたですか……」

「何だとは何だ。……それより、お前」

「何？」

別にジャンヌに言い寄られることがあるとは思わないのだけど、なんかあったのかな？

「デュランダルを返せ」

「ああ、あれのことね。……無理だね、返せないよ」

返すわけがない、あんな代物ななかお目にかかれないうのに、誰が返すと言うのか。

それに、あの剣は……

「今はボクたちの物だ。等価交換じゃないと受け入れない。それに剣がなくて困ると言うのなら、すでに用意はできてるよ」

「ふざけるな!!」

怒気を飛ばすと同時に地面が凍りつく。

さすがは魔術師だな、俺とは能力とは全然違うね

「ふざけてなんかないよ。いたってまじめです。なんなら今ここで決着をつけますか？ デュランダル」

相手を誘うように手招きをする。

が、肝心のジャンヌは仕掛けても来ないし、動きも見せることはなかった。

「ふん、今やつても勝てる気がしない。勝てない試合をするような馬鹿な一族ではないのでな」

「話がわかる相手でよかったよ。僕も今だけは戦いたくなかったしね」

「そいつのことか」

ジャン又は俺の足元で寝ている静を見ながらそう言う。

「隠しはしないのだな」

「あなたのおかげで全てペアになったんですよ。いや、それにしても良くわかりましたね、彼女がここにしていることが……」

「勘違いしてようだな、一言だけ言わせてもらおう。そいつから、連絡が来たのだ。そして、私たち“イ・Ｕ”も彼女を求めている。利害の一致と言うわけだ」

ふーん、どこかおかしいと思えば……ボクが言ったことをそんなに深刻に考えていたとはね。

「そうか、そうだったのか……それなら、ごめんね。ジャンヌ」

なんか気持ちが一瞬だけ沈みこみそうになったが、その問題は完結しているので妥協することにした。

今、静かは満足しているのかな？

あとで聞きだす必要があるな、と頭の隅っこにおいておくとする。

「ところで、カムイ」

「ん？」

まだ何かあるようだ。一応聞いておこう。

「理子のところにいかないのか？」

「え？」

「その様子だと、知らないようだな」

呆れたようすで、頭に手を置きながらジャンヌは続けた。

「あいつらは一週間前ほどからすでに潜入している。教えてもらっていなかったのか？」

いや、理子に限ってそんなへまをすることは……、とか何とか言っているが耳に入らない。

「もしかして、独自に動く、っていったから……気をつかって教えてくれなかったのか……」

「そうか、それならつじつまが合う。まあ、大丈夫だろう。どうせブラドは今日本にはいないからな」

「それは違う。それは違うんだ！ 本当に危険なやつは近くにいるんだ！」

小夜鳴。そう、あの小夜鳴だ。紅鳴館のことを静に調べてもらったところ、そこにすんでいるのは小夜鳴であつたのだ。

あいつはまずい。いろいろな意味でまずい。殺し屋の直感がそう言っていたのだ。

あいつは……俺と同じにおいがする
この直感が正しければ、あいつらは……

「静、起きろ。仕事の時間だ」

静をお姫様抱っこで抱えながらジャンヌを振り切り自室に全力で

戻った。

すぐに用意していた白衣をまとい、インカムをつけて部屋を飛び降りる。

「紅鳴館までの道のりをよろしく頼む」

「紅鳴館ですか？ そこには現在あの人たちはいませんけど……」

「へ？」

なんだか、今日は驚くことが多いような気もするが……。いちいちそんなことを気にしている場合ではない。

「なら、理子たちのいる場所までオペレートをお願い」

「私は大丈夫だと思うのですが……とにかく、あの人達のところですね」

眠たそうな声と、不審そうな声でそう言うが、それでもしっかりとオペレートをしてくれる静に頭が上がらない。

あまりこのような移動手段は使いたくはなかったが、時間が少しでも惜しいのでビルとビルの間を飛び越える。

飛距離が足りないところは血の塊を作り、それを足場代わりにストリートに理子たちのところまで全力で急いだ。

杞憂でもいい、大事になる前に間に合え

雨が降り始め、雷がなった。それらは不気味な雰囲気をかもし出していた。

第16話 特訓WW（後書き）

誤字脱字訂正などありましたら、報告をよろしくお願いします。

第17話 吸血鬼の弱点（前書き）

すいません。前回の後書きで『明日には終わらせる』と書いておきながら・・・この体たらく。本当にごめんなさい。

そしてこれ書いていて、よく思いました・・・カムイってどっちの見方なんだろう？

第17話 吸血鬼の弱点

第17話

おいおいおい、うそだろこれ。

人間じゃない。そう、人間じゃない。

上半身のシャツは全て破れ皮膚は赤褐色色になっていた。下半身も大事などころだけは布がキチンと隠しており、大事にいたっていないが太ももから下が毛むくじらになり、その太さは人間の比ではない。

「檻に戻れ、繁殖用牝犬。^{ブルド・ビッチ}少し放し飼いにしてみるのも面白えかと思っただがな。結局お前は自分の無能を証明しただけだった。ホームズには負ける、盗みの手際も悪い、弱え上に馬鹿で、救いようがねえ。パリで闘ったアルセーヌの曾孫とは思えなえほどだ」

少々なまっついていて聞きにくいところもあるが……

何だよ、何だよ、何なんだよ！！

体中の血が騒ぐ。ナイフを持つ手に力が異常に入り、血が滴っていた。

「イ・ウーだろうがどこだろうが関係ねえ。世界のどこに逃げても、お前の居場所はある檻の中だけなんだよ！ ゲハッ、ゲババババッ！」

人は怒ったときどこまで理性を保てると思う？

怒りの程度にも関係することだが、俺は今簡単に怒りに身を任せることができるであろう。

確かに、俺は理子のなんでもないし、あいつとのかかわりすらほ

とんど持っていない。

しかし、大事にしているものを汚された気分と言えば俺の気持ちを表現できるであろう。

カツカツ、と音を鳴らして歩きブラドの前に出る。

「あん？ お前は確か……」

アリアとキンジがブラドの声に反応して後ろを振り向く。
ブラド自身も突然の訪問者に少々驚いているようだ。

「覚えださなくてもかまわんよ。労力の無駄だろう」

思い出さなくてももらわなくても結構、必要ない。
殺してやる。殺してやる。

「まさか、お前もコイツの協力者だったとわな。 “一斬必殺”の技を受け継ぐ一族」

「……ふふ、コイツは驚いた。その伝承は全て先祖が潰したと思っていたが……未だに現世に残っているとはね」

紅色の眼と髪を持つものあり。普段は温和でおとなしいが、ひとたび刃物や凶器を持てば近づけるものなし。その技はまさに神速、全ての物、人を一太刀で葬り去る。そこに一つの例外もなく、二度はない。

これは、俺たちの一族の伝承。

先祖たちは代々この伝承を世間に広めないように潰してきたのだが……とんだつぶし残しがあったもんだ。

正直、俺でさえ忘れていた伝承をブラドは知っていた。

ちなみに“一斬必殺”とは、能力のことも関係しているのだろう。切ったところから血を操り、確実に死に至らしめるところからきているようだ。

「今日は本当にいい日だなあ、理子。お前は檻に戻り、俺様はあいつの血を吸い、ナイフをコレクションに加えることができるのだからなあ」

いつの間にか、俺がやられる前提になっていることについてはもう何も言うまい。

さらに一歩だけ進む。

カツン、とした音があたりに響き、ブラドの横にいた狼が突っ込んでくる。

良く調教された、動物だ。俺の威嚇をもともせずに向かってくるのは、主人さえ間違えなければ名犬だっただろうな……

ヒュンッ！

小さな罪悪感と哀れむ気持ちでナイフを無造作に横薙ぎに振るう。ナイフの切っ先を追いかけるように放たれた血の鞭が狼の体を弾く。

吹き飛ばされた狼はすぐに受身を取りきれいに着地するが、足が弾けとんだ。

血と肉があたりに飛び散り、骨がむき出しになる。

キャンキャンと痛みに身をよじるように吼えるが、次の瞬間には……バシユン、その音と共に体が吹き飛んだ。

内臓までもが血と肉の塊に混ざる。

キンジとアリアはあまりの光景に目をそむけたが、ブラドだけは、ゲハッ、ゲハハハッ、と笑っていた。

「馬鹿みたいに笑っていていいのか？」

一瞬だけカムイの体がぶれた。

そして、現れたカムイのその手には理子がいつの間にか抱かれて
いる。

ほお、と感心したように呟き、右腕を上げる。

理子の頭を掴んでいたブラドの右腕は手首から先が地面に転がって
おり、傷口のほうは赤い煙が上がり恐ろしいスピードで再生して
いた。

「理子、キンジとアリアとともに隠れておけ、すぐに終わらせてや
るから」

未だに何が起こったのか理解できていない理子に諭すように優しく
言って、そつ、と地面に下ろす。

「ゲハハツ、人間ごときが、俺様を倒すとはざくか。……そういえ
ば、お前は理子に興味があつて手伝っているんだよな？ 教えてや
ろうか、あいつの力の正体を」

「意外と親切なんだな、人間に」

「はっ、絶望を味合わせてやるといつているだけだ」

「それなら結構だ。絶望など何度も何度もこの世界で味わってきて
いる」

裏の世界というものは本当に醜いものだった。

まあ、この話はあとですることにしよう。

「ああ、ブラド。一つだけ言わせてもらいたい。理子の興味が髪を動かせるところだけではないからな」

確かに、俺の興味の判断基準は特殊な力の有無が必要条件だが、それ以外にいろいろと存在する。

「俺にはわかるんだよ。そいつの体を見れば、どれだけ自分の体をいじめてきたかが……俺がそうだったしな」

筋肉のつき方、身のこなし、普段のしぐさ。それだけで判断材料になる。

要は、どれだけ努力したかどうか、だ。

この世には『十歳で神童、十五歳で才子、二十歳過ぎればただの人』という言葉がある。

そのような人物には興味など抱くことはない。

「だから、関係ない。理子のことをお前にいちいち言われる筋合いなんてない」

両腕をだらりと下げ、半身にした状態で足を肩幅に開く。

「さあ、やろうぜ、ドラキュラ伯爵。家畜に殺される気分を教えてやるよ」

「ゲハハハハッ、いいぜ、いいぜ。やってやろう。強気なやつが串刺しになるときほど心が躍ることはない」

相変わらず、気味の悪い事をいい続けるブラド。
が、何の感情すらわからない。今はただ殺すことだけを……

「何を言っているんだ、カムイ」

「ちよつと待ちなさい！」

ブラドから目を離し、アリアとキンジの方を向く。

「武偵は人を殺してはいけない」

「ママの冤罪99年を白状してもらう必要があるの、殺させはしないわ」

うつとおしい、ブラドもそう思っているのか近くにあった電柱をへし折り、ズシン、ズシン、と徐々に近づいてくる。

「邪魔をするな、お前たちの相手はあとでゆっくりしてやるからよ
お」

この二人にはかわいそうだが、今は本当に邪魔。

よって、行き過ぎた行為をしなければブラドを邪魔することはない。

ずおおおおおッ、と不気味な声を上げて息を吸いこんだ。

その後……

「ワラキアの魔笛に酔え——！」

ビャアアアアアアウヴァイイイイイイイイイイイイ

ッ！

大音量の咆哮、普通の人間なら気絶でもしかねない。

しかし、そこは武偵。特に強襲科のアリアはキンジほど、効いていないようだ。

スタングレネードに対する耐性なのだろう、キンジもすこしぐら

いはあるようだが、訓練しているものと比べるまでもない。

俺のほうはナイフを縦に振り音を掻き消した。

音は結局…空気の波でしかない、波なら断ち切れればいいことだ。ちなみに俺の後ろにいた、理子に目立ったダメージはなかった。

「ど……ドラキュラが、吼えるなんて……聞いていないわよッ！」

「――！」

アリアはブラドに負けじと吼え、キンジの方は完全に沈黙していた。

対照的な二人だったが、大きな部分でそれは異なっていた。

「血の流れが……くくく、そういうことが」

キンジの血の流れが変わったことに気が付いた。

今さっきの咆哮は、ヒステリアスモード破りだったのだ。

音がHSSを破ったことに対しては、興味がわいたが……殺すべき対象にそんな情けはかけられない。

ブラドがキンジを殺傷範囲^{キングレンジ}に入れたところで、その巨大な鉄柱を振りかぶった。

さすがに止めようかと思っただが、アリアがすでに動いていたので無視。

ギイイイッ！

甲高い衝撃音が響き、アリアはヘリポートの端まで吹き飛ばされた。

それを心配するようにキンジがアリアの名を叫ぶが、遅い。振り切った腕を戻しながら鉄柱がまたキンジに襲い掛かる。

「ちっ」

キーンッ！

ブラドとキンジの間に鉄柱を受け流すように衝撃をそらしたが、少しだけ反応が遅れてしまった。

キンジは数十メートルも吹っ飛ばされ、落ちた。

まずい、と本能が察して飛び出そうと足に力を入れるが、その前に理子が走り出していた。

「理子！」

「大丈夫」

声は若干震えているが、理子の目に迷いはなかった。

誰が今の彼女をとめることが出来るであろうか、いやできはしないはずだ。

だから、俺の今やることは……断ち切るのみ！

「これで邪魔者はいなくなっただぞ」

「ああ、一人例外がいるが全力で行かせてもらっぞ」

キンジのことは、反省の必要があるが、今は理子に期待をしておこう。

別に全力を見られたくないということとはなかったが、なんとなくアリアにだけは見て欲しくなかった。

理不尽な召使い〃キンジのようにはなりたくない。

震脚で地面を強く踏みしめ、受け流した状態のままだったナイフを振り上げる。

パァンッ！

空気の壁を破った音が聞こえ、ブラドの左腕は綺麗に切断される

が……すぐに再生される。

「……………」

「どうしたあ？」

不思議そうに見つめる、俺に見せ付けるように左腕を目の前で振ってみせる。

ふむ、何度でも回復するようのか……厄介だな、とでも言いたい
が……

「さすがに無限はないな」

次は左肩から右腰までの袈裟切り。

間違いなく切り離れた感触がしたはずなのだが、ブラドの太い左腕が向かってきていた。

それも腕を返すように内側から切り離すが、すぐに再生し向かってきた。

眼前まで迫ったそれを、切り落としての回避は不可能、そう考え横のステップで回避する。

「無駄だあ、そんなことでは俺様は殺せないぞお？　一斬必殺よ」

「その名は途絶えたはずだったんだけどな」

互いに軽口を交わしながら、殴る、切る、といった行為を繰り返していた。

いつの間にか、キンジと理子がヘリポートに帰ってきたことにも気付かずに……殺しあっていた。

「おもしろいね、お前を殺す理由さえなければ……ホルマリン漬けにしてやったのにさあ！」

「ゲハハッ、よくほえるな小僧。お前はすぐに俺様に血を吸われる運命なんだよ」

「良い、アリア、キンジ。ブラドには四つの魔臓っていう——人間にはない、小さな内臓があるの。それが吸血鬼の無限回廊を支える臓器なんだよ」

タワーの頂上に上った理子はカムイとブラドの戦闘の死角で話し合いをしていた。

戦っている二人は戦闘に集中しているのか、未だにこっちにきがついていなかった。

「その魔臓を四つ同時に壊すことでしか、ドラキュラは倒すことができない。もし、一つでも残っていたら……すぐに回復する」

「でも、三つしかないじゃないか」

魔臓の見分け方は、ブラドの体の表面にあるのあざのようなどころだ。

そこに魔臓は存在しているが、現在ブラドの体表には三つのあざしかなかった。

「理子は……四つ目の魔臓の位置を知っている。アイツと……暮らしていたから」

「わかった、俺は信じるよ理子のこと」

ヒステリアスモードのキンジが理子に甘い言葉を呟く。
アリアのほうも、軽くうなづく。理子を信じるようだ。

「今、カムイのほうにブラドの注意は向いている。私たちのことは眼中にないみたい」

「カムイのほうもだけどな……」

キンジやアリア、理子の眼前で繰り広げられている戦闘行為は、常軌を逸脱しているものとなっている。

カムイの動きは速すぎて捉えることができないし、ブラドの無限の回復量にも驚かされる。

ただ、明らかにカムイが不利になってきていることは必然的だ。人間の体力では、無限に勝てるはずがない。

「だから、このチャンスを有効に使わせてもらおう。チャンスは一度きり……行くよ！」

「ああ」

「わかったわよ」

理子に続き、アリアとキンジが駆ける。
これが最後の望みだった。

「ちっ」

迫り来る拳や蹴り、鉄柱をいなしながら、後退する。
ナイフを持つ手にもあまり力が入らなくなっていた。

くそっ、きついな……もう、あそこを狙うしかないのか？
カムイにはブラドの体の情報が見えている。

血液操作能力は人間以外の血でも可能なので、吸血鬼も例外ではない。それは今さっき殺した狼が証明してくれているだろう。

よって、見えているのだ。ブラドの弱点が。

ただし、それがなんなのかカムイには理解できなかった。

「ブラドお！」

急に俺とブラドの戦いに入ってきたアリアがブラドの両肩を狙って銃を撃とうとしていた。

とっさに、止めようとしたがこれもまた、遅い。

邪魔されてたまるかよ、こんなに楽しいのに！

銃口は確実にあの部分を狙っていることがわかった。

すぐさま銃弾を切るために準備を整えたが……

ピカッ！

予期せぬ雷。

この場にいる誰もが予想していなかったときに、不意に鳴った。それぐらいでどうにかなるような問題ではないが、アリアは別だ。雷が苦手なので、雷と同時に放たれた弾丸は……一発だけ狙いからそれていた。

それに、ブラドのことなのにどこか安心した俺は、ニヒルな笑みを浮かべブラドに振り返る。

その笑みにブラドも応え、笑う。

今この瞬間だけは、コイツとわかりあえていた。

コイツをコロスと――

バスッ！

ただし、キンジのベレッタがマズルフラッシュを発生させるまでの話だ。

キンジの放った銃弾は、アリアの狙いからそれた銃弾に当たり……軌道を修正させる。弾かれた弾丸もまた、あの部分に当たった。

まるでビリヤードのように見えるそれは、確実にブラドの表情に焦燥の色を浮かばせた。

そして、俺の後ろで聞こえた……とんっ、とした音。

「――四世――！」

ブラドが叫び、パン！

理子がどこかに隠していたデリンジャーが、発砲音をあげる。それもあの部分に当たった。

すると、今まで完全に殺せないと思っていたブラドの体が傾く。ブラドのあの部分は弱点であるといった仮説がたった今、証明された。

カムイの目に映っていた、人間とは違う血の流れ方をしていた部

位こそが、魔臓。

魔臓の位置は、右肩・左肩・右脇腹・舌。そこをキンジとアリアと理子が撃ちぬいたのだ。

弱弱しく、理子に手を伸ばす吸血鬼を見て……拍子抜けしてしまった。

ナイフを仕舞い、ポケットに手をつ突っ込む。

「はあ、つまんない」

本当にがつくりときてしまったが、目の前にあったブラドの顔を見て……気が付いた。

「ねね、ブラド。これ、もらうね」

そう言って、口の中にあった犬歯と思われる鋭く尖った牙を一本だけ抜いた。

断末魔すらあげる気力がないのか、依然として黙ったままだったブラドに手を振り、タワーから降りる。

これで一応この事件は解決した。

第17話 吸血鬼の弱点（後書き）

割と急いで書き上げたので、相当駄文になっていたかもしれません。テストが近いこともありましたので、こんなことになってしまいました。ごめんなさい。

誤字脱字訂正などありましたら、よろしくお願いします。

第18話 ボクは本当に医者なのか？（前書き）

タイトルは作者の心をより細かく表現していますw

うん、そろそろこいつの医者としての実力を出そうかな〜と軽く考えている今日この頃。

第18話　ボクは本当に医者なのか？

第18話

最近、ふと思ったんだ。

医者の仕事あまりしてないよね…

いや、だってさ？　ボクは一応休みを取っているんだけど……やる
ことがなさ過ぎて、よく救護科アンビュラスのここに来るんだけど……まったく
といっていいほど、人が来ない。

今ここにパソコンがあるなら…

『仕事をしに来たのに、仕事がなくてワロタww』

と書きたいところだ。いや、打ちたいところだ。

「どうでもいいか……あゝ、あゝ、そこそこ…」

「ここ、ですか？」

「そうそう、そこなんだよ。なかなかできるじゃないか……」

「ふつ、私を誰だと思っているんですか？」

「四六時中PCの前に座っている。廃人様」

「敬いなさい」

「ハハー」

本当にくだらない会話は放って置いて、現在カムイと静は診察室にいる。

診察室に男女が二人きり……ハアハア

どこかの変態がへんな妄想をしているが、二人がやっていることは…

「うむうむ、まさかこんなにマッサージがうまいとは…」

「ちょっとした、特技なんです」

どこでそんなことを特技にしたのか？ と言う疑問は放っておいて…本当にうまい。

「あふう……そこが良いの、本当に良いの」

こむらを中心にもんでもらっている。

その理由は……

「まったく、自分の体のこともわからないんですか？」

そう、あのブラドの腕を切り落として理子を救ったときの技の反動が今出ているのだ。筋肉痛となって…

「本当に医者として情けないな、自分の体のこともわからないなんて」

あのとくに使った技は『縮地』と言う。
知っているだろうか？

あの有名な『・二スの王子様』『魔・先生ネギま！』『るろ・に剣心』の作品でも使われているあの『縮地』だ。

が、決して『瞬間移動』と言うことではない。

もともと『縮地』とは…遠い距離を特別な歩法で距離を縮めたかのように移動する技術である。

ただ、普通の人間が高速で移動すると言うことは、反動もそれなりにあるということだ。

「自分の限界以上で使ってしまうとは……ホントあ那时的僕は何をしでかすかわからないな」

今ふと気が付いてしまったが、『●二スの王子様』に関して言えばどこことなく悪意を感じるのはボクだけだろうか？

ボクたち……えと、ボクたちの家系はそれを自由に使えるように体を鍛えるのだけれど、最近はそれをサボっていたから、こんな結果になってしまったと言うこと。

「馬鹿ですね」

ぐうの声も出ない。

「面目ない」

「……まあ、良いです」

すごく聞き取りにくい声が聞こえた。

「ん？ 今なんて？」

「な、なんでもないですっ」

気になって聞いてみた結果、なんかうろたえた様子であわてた。

その後、ボクの足をもんでいた腕に無駄な力が入ってしまい

「ぎゃああああああああ」

思いつきり叫んでしまった。

コンコン

おっと、扉を叩く音が聞こえた。

「入ってもいいよ〜」

「この状態で!?!」

むう、別に良いじゃないか。

「所詮、ボクが静にマッサージを受けているだけだろ?」

「つくづく思いますが、医者ですか?」

「いえ、医師です」

「……………はあ」

このかみ合わない会話。

個人的にはこのような会話はすきなのだが、確実に静が疲れているので少しだけ次からは自重しようと思う。

本当に“少しだけ”だかな…

「あはっ、カムイが女の子に馬乗りされてる〜」

お、この声と喋りかたは……

「リュパン！？」

「理子ちゃんか」

さきに静に言われてしまったことに、ちょっとしたイラつきを覚えたがそのまま話を続ける。

「それで、何のよう？」

「あはは〜、とくにないよ〜」

「え？ マジで？」

「マジです」

軽い調子でケラケラと笑う理子に面くらってしまふ。

「そういえば、まだカムイのあだ名決めてなかったね〜」

さっきからずっとこの調子の理子。
そうか……

やっと理子の意図がわかったので、まずは静を手招きで呼び

「ごめんね」

それだけ言つて、くびの後を強打して気絶させる。

静は「アッ」とした声を上げて力を失った体をボクに預けるように倒れた。

それを受け止めて自分の足に据わらせるように抱きしめながら倒れないように押さえる。

これ実際はアニメや映画で何気なくやっていることだが、本当に難しい。良い子のみんなはあまり真似しちゃダメだよ。

「やっとか」

急に男口調になり始めた理子がそう呟いた。

「本当の用件は？」

「そいつは外に出さないんだな」

「二度はないよ。本当の用件は？」

「怖いな、ただ話がしたかっただけなのに」

元の調子に戻った理子がボクの肩を軽く叩く。

「ん、何でも聞いてくれ。こいつが起きるまで、で良いよね？」

「全然OK」

あまりのテンションの高さに今でも目の隣に星が出て「キラッ」となりそうだ。これに横ピースまで加わったら（ry

「ねえねえ、何であの時私を助けてくれたの？」

「ブラドのことね……特にこれと言って意味はないよ。ただ、ボクの興味対象を馬鹿にされて怒っただけだし、それに彼はボクが殺すべき相手だからね」

「殺してないじゃん」

「うん、先に君たちにやられたんだ。ボクは獲物を奪うほど悪いやつじゃない」

「殺し屋のくせに？」

まあ、そう思うだろうね。

「けどさ、わざわざ他人にやられたやつに止めを刺すなんて……俺のときのボクがプライドが許さないらしかったんだよね」

今ならくだらないプライドだと思えるが、当時の俺のボクはたぶんそれがとても嫌だったのだろう。

昔から良くわからないのである。

別人格でもないくせに自分でうまく制御できない。やりたいことがあってもうまくいかないときがある。

「そう」

妙にしょんぼりとした感じでそう答えた理子。

「じゃあ、話は変わるけど私を助けたときの技」

「うん」

縮地のことが……

「あれを私に教えてもらえないかな？」

テンションが上がっていると思えば、しょんぼりしたり、そして真剣な表情になったりと忙しいやつだ。

ころころと変わるのは嫌いではないが、相手にしていて疲れるという欠点がある。

考え方を変えれば、飽きない、と考えられるのでカムイは好きであつた。

でもね…

「無理だよん」

別にこれは俺たちの家系の技だから、一子相伝なんだ、とか言う事実はない。

「ちよいと失礼」

そう言い、理子の…ふくらはぎ、太もも、尻、の順に触っていく。触るたびにこらえるように息を吐く。

しかし、気付けば理子の愛銃『ワルサー』が俺の頭に突きつけられていた。

「ナニシテイルノカナ？」

ちよ、それ…レイプ目。

実際、後ろめたいことはない。

「やっぱりだけど、筋肉のつけ方が違うんだよね」

「つけ方？」

「うん、無理だね。今から鍛えようとしても今ついている筋肉が邪魔する。だから無理だ」

「無理なの？」

「うん、絶対に無理。今のままやり方を知ったとしてもできないし、使えばキミの体がどうなるか……知らないよ」

「アッハッハ」と笑いながらそうつけた。

「まあ、いいか。じゃあこれが最後の質問」

あまり気にしていないようだ。

最初からそう告げられることを知っていたかのような、そぶりだ。
はかったか……

「あなたは敵？ それとも味方？」

「……………」

あえて黙る。

うん、そうだよな。さてなんと答えればいいのか…

まあ、ここは……無難に……

「知らない。ボクはどっちでもないよ。ただ君に興味があるだけだ。味方と思ってもかまわないし、敵だと思ってもかまわない」

興味がなくなったからといって、殺すわけではない。

「そう言うことは君が君で決めてくれ」

その後理子は黙ってここを去っていった。

ちなみに今日ボクの診察室に来たのは彼女一人。

ボクって仕事しているのかな？

ただただ疑問に思えばかりだ。

第18話　ボクは本当に医者なのか？（後書き）

誤字脱字訂正などありましたらよろしくお願いします。

第19話 ふ、二人目？（前書き）

送れてスイマセン。

第19話 ふ、二人目？

第19話

「またまたあ、逃げちゃダメだって。仲間が殺されたぐらいで騒がないの」

背中を見せながら走り去っていくターゲットをスコープを覗きながら観察しているものがいた。

撃たない。まだ、撃たない。

持っている武器は『HK417』のスナイパーカスタムだ。H&Kが作ったアサルトライフルをスナイパーライフルのように長距離で使用できるようにしたもので、元アサルトライフルだったのでその連射力を殺すことなく射程と命中率を上げたものだった。マガジン装填数はドラグノフと同じく10発。使用弾薬は『7.62 x 51mm NATO弾』。

「仲間思いのないやつだな、死んじやえばいいのに……で、今から殺すんだった」

忘れていたのを思い出したかのように言った。

目を細めていく、スコープのサイトが目標を中心に捕らえた。

彼女はこういふときが一番好きだった。自分自身の手が目の前にいる目標の命を握っているこの感じが何よりも楽しくて楽しくて仕方なかった。

しかし、その楽しい時間も……

パアンッ！

一瞬で終わる。

脳みそを撃つたのだから即死だ。だが、彼女は殺し屋。

パンツ！

死体とわかっててももう一発心臓に撃ち込んだ。完全な死を与えてこそ仕事を完璧にこなすと言うことだ。

「ふふふ、お仕事終了っ！ リー君は元気にしてるかな？ また一緒にお仕事で着たらいいな」

「救急の患者だ。よろしく頼むぞ」

理子が診察室に来た翌日。不幸が待っていた。怪我などに特化した病院が武偵病院。そう思われてもかまわない。車にひかれた患者が武偵病院に運ばれてきたらしい。そしたら俺が呼び出された。

しかしな……なぜにこの難しそうな患者を先生は俺（休暇中）に押し付けるんだ？

「いやそんな顔をするな、下げるぞ」

「喜んで診させていただきます」

救護科の先生相手に思いつきりお辞儀をして、振り返る。

くそつ、くそつ、これだから教師と言つやつは……あー、めんどくさい。交通事故ぐらいかわせよ。車にあたっても怪我するなよ。せめて、意識不明にだけはなるなよ……

普通に人間技ではないことに気が付いていないカムイ。それができたら交通事故なんて起こらないだろう。

「何か文句でもあるのか？」

「はい、ですがそんなこと言ったら死んじやいますからね」

今できる最高の笑顔で応えて、すばやく更衣室にいく。

手術着に着替えて両手を消毒し、ゴム手袋を……と、とにかく着替えるのを数秒でこなして手術室に入る。

ここからは関係者以外立ち入り禁止らしいので描写が書けません。と書きたいのが作者の都合。

「待たせた、さつさと始めるぞ」

メスを持った瞬間に目つきが変わるのはもちろん。口調すら変わった。

ちなみにこの患者……男性で肋骨が内臓に刺さっている状態で運ばれたようだ。

ゴム手袋では血に触れることができないので、どうするのかと言うと……なめる。メスについた血をなめるのだ。メスは通常使い捨て、それか一回使ったら消毒するのが基本だ。

感染症やばい菌が入らないためなのでこれは鉄則。

「止血完了、と」

アンビュラス
救護科のSランク取得の条件は……
アサルト
強襲科が一個中隊を壊滅でき

ると言うのとは違い、完全実績制だ。

医者として治療した人数、病気の種類等などたくさんの詳しい検査を受けた後にSランクを名乗ることができる。

正直、俺が取るとは思ってもいなかったんだ。ただ、難病とか知らない病気、そして怪我は全て違うから自ら進んで診ていただけなんだけど……いつの間にか取っちゃたんだよね。あ、それと母親ゆずりの整形技術か……ホントすごい人だったよな。

当時は変態のうわさが流れる前だったから良かったけど。いまじや、思いっきり名前は落ちたからな。

後悔はしていない！

Sランクになったから面白い病気や怪我がたくさん来ると思ってたんだが……どこで道を間違ったのかな？

「術式終了。おつかれさん」

ん、腕は鈍っていなかったようだ。一時間で終わった。先生の驚いた表情が頭に残っている。

まったく、静の修行もあるというのにめんどくさいな。手術着を脱ぎ、制服に着替えて白衣を纏う。

ピピピ、携帯の音になる。未だに良く使えない携帯だったが通話ボタンぐらいは覚えることができた。なので通話ボタンをおし電話に出る。

「もしもし」

『カムイ』

相手は静のようだ。

「なにかよろうですか？ 修行は昼からだったと思いますが……」

『患者さんが来ています。早くきてください』

ゆつくりできると思ったら、こういう結末だった。なんと不幸なことだろうか。精神力が、がりがり、とけずられていく気がする。

「ん」

分かったと言い、ボクは歩く速さを早くする。

まだ、ボクのところに来る人がいるのか……物好きな人だな

診察室

「すみません。遅れちゃいました」

急いだとはいえ患者を待たせたのには違いなので謝りながら入る。

「大丈夫だよ？ あは、やっぱり」

しかし、帰ってきたのは語尾を延ばす特徴的な日本語を話す、聞いたことのある声。

「へ？ お前は」

「久しぶりだねー。あえてうれしいな」

「イングヒルトー！？」

従姉妹だった。

第19話 ふ、二人目？（後書き）

これでオリキャラは終了だともいます。

しかし・・・作品の性質上・・・濃いキャラを作らないとな。
そう思っていたのに・・・どこか理想像が理子に似てきた・・・

理子「きゃはゝ、りっこりにしてやんよ!」

・・・理子、なんておそろしい娘!

次回から四巻と絡ませていきたいとおもいます。

第20話 情報（前書き）

遅くなってスイマセン。

第20話 情報

第20話

「イングヒルト？」

すこしウェーブのかかった長髪の銀髪を下ろしている髪形。目は大きくパッチリとしているが、表情からおっとりしているのがわかる。美人と言うよりもかわいいといったほうが似合うだろうか？

身体的な特徴としては……胸は大きい……えー、とにかく出るところは出てしまっているところはしまっている均整のとれたナイスボディ。

それが俺の従姉妹——『イングヒルト・ブレーメ』である。ちなみにドイツ人だと思われる。

なぜ、思われる、と言う言葉を使ったのかと言うと……もともと俺たちの一族は東洋人である。その後、全国に広がり分家を作ってきたので……同じ血が流れているのにもかかわらず、長い時間がかかっているために、その国の特徴を色濃く受け継いでいることが大きい。

一番俺たちに同じ血が流れていることがわかる証拠は、目の色だ。俺の目の色は真紅だが、静は黒っぽい赤だし、イングヒルトにいたってはゲルマン人なので……薄い青紫のような色をしている。

「はい、リー君。久しぶりですー」

俺がイングヒルトの名前を言うと、ふにゃ、とした笑顔を見せて喜びを表した。

「リー君？」

静は聞きなれない単語に反応を示した。

「リオーネ・フェルト。ドイツでつかっていたもう一つの名前なんだ」

「そうそう、だからリー君」

『君』は日本語と言うのにイングヒルトは勝手に『リー君』と呼んできた。相当日本語を練習したのか、そのへんは良くわからないが、驚いているボクがいた。

悪い気はしない、が……

「静さんや？ どうしたんですか？」

ジーーーーー

！……

思いつきり視線をかんじる。しかも、とてつもない負のオーラが漂っている。発生源はもちろん静から……

「他にも従姉妹がいたんですね？」

冷たい口調で言われた。少し怖い。

「うん、いたよ」

「へえー、そうなんですか」

完全なる棒読み、音程なんてものは存在していない。完璧に、私怒っていますオーラが出ている。

んー？ 悪い事は何もしていないはずなんだけど……

「ねーねー、リー君。イングね、今日も仕事があるんだけど……」

仕事——殺しだろうね。簡単に予想がつく。静の家系が一番殺しから遠いからな。そうは言っても狙われやすさは静が一番なんだろうけど……

「手伝って欲しいんだね」

「うん」

おおふ、静からの視線が本当に痛い。精神が、ボクが、体の怪我は簡単に治せても、心の怪我は簡単には治らないんだぞ？

救済の視線を静におくるが……
プイツ、思いっきり横を向かれた。

「リー君、早くいこう。今日は同業者殺しなんだよ」

「なに？」

イングヒルトの實力はよくわからないが、俺のところに来たということは……頭首を継いだということ。そしてその意味は……名前もついたということになる。

「……………」

ポツリと呟く。

「何か言っただー？」

「うん、何も言っていないよ。それじゃ、行こうか」

言葉をにこらせた。イングリヒトだけなら、真相を聞いていたに違いないが……静に聞かせるには少々まずい。

そのためにもその場をごまかすために自分のインカムを静に見せ付けるように耳につける。

「よろしく」

完全に不機嫌になっている静が手伝ってくれるかどうかは知らないが、一応そう伝えておく。

「……………」

「なにをつけてるの？」

ボクがインカムをつけているのを見て首をかしげるイングリヒト。

「なにつて、インカムだよ。これがないとボクが迷子になるからね」

冗談を軽く入れてそう言ってみた。

「だから必要なんだよ。このインカムは……だから、信じているよ静」

少しだけはにかんでみた。相変わらず、静は目をそむける。
が……

「そ、そこまで言うなら、やってあげます。勘違いしないでくださ

いね、そこまで言うからですよ」

……デレタ？

あれ？ どうしてだろう。さっぱり意味がわからないぞ？ どうしてこうなった？ ボクの中では一応、普通に手伝ってくれることだと思っていたのに……

イングヒルトのほうをしてみるけど……ボクと同じような表情を取っている。

「う、うん。それじゃ、行こうか……」

「そうだねー」

若干引きながらも準備をする。イングヒルトのほうはすでに準備ができているようだが、ボクはまだまだ。

白衣を纏い、グロックを一応ポケットに入れておく。

「静、これからのことだが……同業者のことはあまり調べるな」

「それは……」

「これからはイングヒルトにそれを任せる」

急なことだけどこれは前から決めていたことだった。ある程度力をつけたときが一番危険なとき、中途半端な力に自信過剰になっても困る。

もともと俺にも独自の情報ルートがあるし、これまで生き残っているイングヒルトのほうにもルートがあるのだろう。

「別に静を頼らないわけじゃない。お前に降りかかる火の粉を減ら

すためなんだ」

まだ静の実力では、少し踏む込んだだけですぐに死んでいく。

静は両親の死の本当のことを知らない。それにどれだけ情報屋が狙われやすいかと言うことを……

そして静が何かを言おうとしているのがわかったので、それをさえぎるように言う。

「まあ、だけど場所までのオペレーションは任せる」

そしてハンドサインで『ついて来い』とイングヒルトに伝えた。イングヒルトがどこまでできるのかは知らないので、実力を見せてもらおう。

正直、好奇心でニヤニヤが止まらなかった。

第20話 情報（後書き）

イングヒルトの武器は基本・・・『HK417』と『FN57（通称ファイブセブン）』一丁。と言っているにしています。

基本ですので・・・

第21話 彼女の實力

第21話

目的の場所に到着した。海辺にある大型の倉庫付近だ。同業者殺し……しかし、今回は殺し屋ではないらしい。なにやら集団で子供を掻^か攫^{さら}って奴隷として売っているらしい。治安の良い日本でこんなことがおこなわれているのだ。

そりゃ、武偵も必要になるよね……

ボクたちのようなやつは少ない、と言うか普通にいてはならない存在なんだけど……

「イングヒルト……本当にここでもいいのか？」

狙撃手にとって位置取りというものは本当に大切なものだ。攻撃範囲がとても広いので高い場所などが有利なのだが……イングヒルトは三つあるビルの上の一番低いビルを選んだ。本人曰く、一番この匂いがいいからだそうだ。

「ここが一番見た感じもよかったんだよ」

このおっとりボイスで言われるとどうも気が抜けてしまうのはボクだけだろうか？

殺しあう前にこいつとはなしてたら、どこかで気を抜いて死にそうだ。なので早くこの場所から去りたいと思ってたんだが……

「リー君。少しだけ待って……うんしょ、よいしょ……」

イングヒルトはでかいかばんの中からHK417を取り出しレー

ルにスコープを取り付けている。もともと拡張性の高いHK416の改造版だ。レールが付けられているので依頼に合わせた改造が即座におこなえる。

現在は夜。ボクなら暗視スコープをつけるのだがイングヒルトが選んだのは……普通にスコープ。

「お前……大丈夫か？」

「頭？」

いや、まあ、確かに頭のほうも大丈夫か、と聞きたいけどさ、それ以前に夜に暗視使わないでいいのかよ。

「もしかしてこれのこと？」

そう言って指差したのはスコープ。

「うん」

「全然問題ないよ。今日は明るくなると思うから」

「は？」

言っている意味が全然わからない。もう本当にこの子のことからなくなってきた。夜なのに暗視をつけずにやると言う。馬鹿ではないのだろうかと少しだけ……いや物凄く考えてしまうのだが、彼女もこのもちのプロ？　なのかどうかはわからないが、どの道実力が知りたいのでほうっておくことにした。

ここでやられたりしたとすれば所詮その程度ということだ。

最悪医者ですから、即死でなかったら治せるので特に気にしてい

ない。

「それじゃあ、ボクは敵の目をひきつければいいんだね？」

「別に手伝わなくてもいいよ。この程度なら私1人で全滅できるから」

それをいうなら、殲滅だ。

どちらにしてもいい言葉ではないし、意味もそんなに違うわけでもない。使い方が間違っているが……

そんなことはどうでもいいとして……仕事を早く終わらせようとする。

どうしてこうなった？

完璧にイングヒルトの読みどおりだ。

三つあるうちのビルの屋上のイングヒルトがない屋上には敵のスナイパーが潜んでおり……業務用の強力なライトを使って逆光を

使いスナイパーにとって有利なポジションになったはずなのに……
ノーマルのスコープを使ったイングヒルトにより瞬殺。

また、イングヒルトのビルにも人がいたらしく強襲されたのだが……FN57によりこれまた瞬殺。

いくら貫通力が高いからって……ドア貫通で頭を撃ち抜くなよ。
敵がかわいそうでかわいそうで思いつき……笑ってしまったじゃないか。

まあ、所詮子供の命をもてあそぶくそ野郎だからこそ、こんなにも敵がにくいと思ったこともないのだが。ちなみに俺は……敵の真正面に立っているのだが、敵が俺のことをナイフを見て思い出したのか、あまり近づいてこない。それはもう本当に大量の人が俺の前で立ち往生しているのだ。どうも、敵の頭らしき人が「そいつには手を出すな」と言って逃げようとしたのだ。だが、相手は同業者と言っても小物中の小物。縮地でさっさと相手の目の前に移動してやり

「逃げるなら殺そう」

それだけいうと……簡単に止まってくれた。物分りのいいやつで助かったよ。

「まあ、どの道死ぬけどな」

その後は一方的なワンサイドゲームだった。

逃げ惑うやつらを俺が追いたてて、それをイングヒルトが撃ち抜いていく。圧倒的だった。本当に楽に仕事を終わらせることができた。

「俺1人も殺してないんだけど……」

なんとなく、殺してないのが、働いてないのが不満に感じてしま

うのだった。

「これで認めれるよね？」

ナイフをポケットに突っ込んだところで、集合場所に先に来ていたイングヒルトに話しかけられた。

あれれ、ボクそんなに考えが読みやすいかな？

あまりの勘のよさに……少しだけびつくりする。

「これでリー君のそばにいてもいいよね？」

銃の腕前、勘のよさ、不思議な物事の捉え方……

くうううううううううううううううう……いいね！

このところ、興味がわく人物が多い。それもこれも、あのキンジにあってからだ。

理子にジャンヌに白雪に静に……いいこと尽くめだ。

だから、ポンツ、と手を頭に乗せる。イングヒルトは怖がるように目を閉じた。

「興味わかないわけじゃないじゃん？ 良いよ良いよ、それどころかいて欲しいくらいだよ」

アハハ、と笑いながらそうこたえた。

第21話 彼女の實力（後書き）

省略しすぎたかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6950r/>

緋弾のアリア 救護科の変態

2011年9月11日21時34分発行